ノア・ノア

ポオル・ゴオガン著

小泉鐵譯

洛陽堂

ノア・ノア

ポオル・ゴオガン





吾が澤の墓前に
此の譯書を捧ぐ

ポオル・ゴオガン著

ノア・ノア

小泉鐵譯

ポオル・ゴオガン

ノア・ノア

「繪畫は」

洛陽堂發行

譯者序

自分は死んだもの、墓前にこの譯書を捧げる。　自分にも劣らず自分のすること、なすことをよろこび、たのしみにして居た彼女は今は居ないのだ。　若かもこの本は彼女に讀ませるために譯し始めたものである。　彼女は好くテフラのことを語り、



又かの素直なヨテファを好いて居た。彼女が死んでからもう百日以上になる。自分は事毎に彼女のことを思ふことが多い。ことにもう校正がすんだり、表装なんどもきまつて五六日でこれが本になるのだと思ふと笑つてる彼女の居ないのが物足らない。口繪にした「人間の悲哀」といふ繪はブレターニュで描いたもので、タヒティの製作ではないが、死んだものがゴオガンの繪畫のうちで殊に好きであつたものである。それ故に特に彼女の思ひ出にこの繪畫を卷頭にのせることにした。

ポオル・ゴオガン Paul Gauguin は一八四八年六月七日巴里に生れた。彼の父はオルレアン Orlean の產で、雜誌ナチヨナル National の同人であつた。彼の母はアデルン Adern といふて、南米秘露で生れた。アデルンの母は西班牙の男と佛蘭西の女との間に生れて、佛蘭西の女流文士として、又サン・シモニズムの後繼者プルウドン Proudhon の女友達として知られてるフロ−ラ・トリスタン Flora Tristan である。かくしてポオルの血のなかにはこれらの祖先の血が流れて、彼は冒險的好奇心を一生失はなかつた。

ゴオガンの父は一八五一年南米秘露の首府リマ Lima に派遣

せられたが、その旅行の間に死んで仕舞つた。そして一八五五年には母に連れられて歐羅巴に歸つて來た。十四の時に家を逃げ出して數年の間海上生活を送くつた。そして一八七一年になつた。この年彼はこれまでの生活を廢めて、銀行業に就き、雇員になつた。行く處として可ならざるはなしといつた彼はこの職業にも非凡の技倆を示し、僅にして少なくない資産を作つた。そして一八八三年にはダロアゼDaroiseと結婚し、數人の小供も出來て、幸福な日を送くつた。然し彼の眼はまた自然に向つて開かれて來た。そしてこんな仕事が彼を滿足させることは出來なくなつた。彼は藝術といふものゝうちに自然を見出した。彼は閑暇をぬすんで繪畫を勉強した。

彼はこの頃のことをドガ論のなかに書いて居るが、彼は日曜とそれから夜を繪畫の時間に使かつたといふて居る。そしてサロンに出品したりした。そのうちにピサロ Pissaro やギーヨマン Guillaumin なんかと知合になつた。そして一八八〇年にはデュランド・リュール Durand Ruel の展覽會に出した。

それから一八八三年には斷然銀行業を廢めやうと決心をした。このことは彼の家族にとつては大變な危險なことであつた、そして家庭を破壞することであつた。だが又このことは彼の藝術の道には自由を有つて來ることであつた。そして一八八五年には妻と別れて巴里に儉約な生活を送り、猶豫なく藝術上の完全に努力した。この間にあつてマネー Manet とド

ガDegasとが彼に一番影響し、彼はこの二人の間から多くの學ぶべきものを得た。彼はピサロやモネーMonetでは滿足が出來ず、特徵のあるギーヨマンも彼にはマネーの形を弱くしたものゝやうに思へた。一八八六年に彼はブレターニュBretagneに行つた。此處で彼は印象派の潮流と戰ひ、印象派を乘り超えやうといふ目標しを探した。そして彼は一八八七年にはマルティニクェMartiniqueに旅行し、一八八八年に再び彼はブレターニュに歸つて來た。此の時にはゴオガンには新らしい世界が開けて來た、新らしい色と形とが見えて來た。そしてピサロなどから遠くなり、マネーやセザンヌの肩をもつやうになつた。

これより以前彼は一八八六年に巴里でヴィンセント・ヴン・ゴ

オホ Vincent van Gogh に會つた。ゴオガンはゴオホに招ねかれてアール Arles に行つた。然しそれは変りの上に於ては面白ない結果になつた。然しこの二人が一共にすごしたといふことは決して無益のこと、無意味のことではなかつた。

一八九一年まではブレターニュや巴里を行き來して居たが、この年四月に到當歐羅巴を去つて、六月八日タヒティ Tahiti に着いた、そして一八九三年まで二年の間其處に土民の間に彼は生活した。その間の記録が卽ちノア・ノアである。ノア・ノアとはタヒティの言葉で「芳ばしい香」といふことらしい。タヒティは佛領でソサイティー群島のなかの島で、南緯十七度四十分、西經百四十九度二十分の處である。丁度布哇の眞南にあたる。

この物語ノア・ノアと無數のタヒティに於ける製作とをお土産に一八九三年の九月に歐羅巴の地を踏んだ。そしてその十一月にはデュランド・リュールで展覽會を開いた。然し世間の人の眼には唯奇怪なものと映じたゞけで、少しも解することは出來なかつた。彼の企は失敗に終つた。次いで一八九五年に彼が展覽會をやつたとき、ストリントベルヒに序文をたのんでことわられた話がある。

そして彼はまた土民の間に歸りたくなつた。一八九五年彼は又歐羅巴の土地を去つた。そして彼は一九〇一年の秋マルクェサス群島 Marquesas のなかのドミニカ Dominika の島に移り、一九〇三年五月九日其處で死んだ。

ゴォガンは繪畫の外、石版、彫刻、陶器の製作等何でも能く出來た。なほ彼は文章をも能くした。マイエル・グレフェはこのノア・ノアを評して現代唯一無比の詩集、ホーマーと架を同じうすべきものといふて居る。

彼の死後間もなく遺作展覽會があつた。この時彼の作品が初めてサロンに入つた。

この小傳はマイエル・グレフェ Meier-Graefe とルドフ・アイエル・リーフスタール R,Meyer-Riefstahl とを主とし、多少補つて簡略にかいた。

挿畫は全部ノア・ノアの舞台であるタヒティの製作のみを入れる心算りであつたのが、「人間の悲哀」が前述の理由に依つて卷頭に入り、又「マルクェサス島にて」といふ色刷が本屋の注文に依つて入ることになつた。然し之も決して關係のないものではない。附錄にした「繪畫は」といふ覺え書きはドミニカの島で描かれたものであり、又「繪畫は」の內容が色彩のことに言ひ及んでるのを思ふときこの挿畫も亦無駄でないといふことを思ふ。

一九一三年一〇月二九日

譯　者　識

ノア・ノア

あなたは何を見たか話して下さい。（シヤアル・ボオドレエル）

六十三日間の航海、待ちあぐんだ六十三日の後、私達は六月八日の夜半に波間に雁木なりに搖られて居る異樣の火光を認めた。鋸の齒形の刻をのこして黑い圓錐の杜は暗がりの空からとけて來た。

船はモレアMoreaを周航り、タヒティTahitiは私達の前にあるのだ。

二三時間して日はしらみだした。船は徐々と礁礁に近寄り、船路に入り、恙なく船着に着いた。

最初見渡したところでは島のこの邊の様子は別に不思議なものはなかつた。たとへばリオ・デ・ジアネロ Rio de Janero のあの立派な入江にくらべるやうなものはなかつた。

ノアの洪水の時に浸された山の頂きがある。僅にほんの頂上だけが氾濫せる水の間から頭を擡げて居た……ある一家の人達はそこにのがれ、そこに新しい種族の基礎をおいた。――珊瑚蟲はそこに匐ひあがり、その頂きにかたまり、そして數百年の推移のうちに新らしい陸を作つた。それは何時まででも何時までも大きくなつて行く。然し孤獨と隔離といふ本

來の特質を保つて居る、そして海はかの無際限といふことのうちになほそれらを高めて居る。

朝の十時に私は知事の黑人ラカスカアデ Lacascade に自分を紹介した。彼は私を一角の人物のやうにもてなした。私はこの敬意を——何故かは知らないが——フランスの當局が私に任せた使命のおかげだと思つた。勿論それは藝術上の使命であつた。然し黑人の眼にはこの言葉は政府の間者といふのと同意義であつた。それで私はこの嫌疑からのがれやうと骨折つた、が駄目だつた。知事の周圍の人達は誰も皆、いぶかしい顏をして居た。それで私の使命は何も報酬を求むるものでないといふた時にも、彼等はこのことを信じやうとはし

なかつた。

パペエテ Papeete の生活は私には直ぐに苦しくなつた。まことや、こゝも歐羅巴であつた――歐羅巴、そこから私は解放されると信じて居たのだのに――そればかりではない、なほそのうへに、殖民地の蕪雜亂行と歐羅巴の道德、流行、罪業、文明愚の馬鹿らしき摸倣とのおほそれた狀態にあるのだ。

私は逃げだしたもの、その物を見出さんがために、かくも遠路をしなければならなかつたのかしら。

それでも然しある社會上の出來事が私の興味をひいた。王様のポマアレ Pomare はこの當時ひどくわづらつて居られた。その臨終の時が日々に待たれた。

都市は段々に不思議な様子をして來た。ありとあらゆる歐羅巴人、商人、役人、軍人、兵隊は沓外の時とおなじやうに街々に笑ひ、唄つてたけれど、土人達は眞面目な顔附をして、打ちしづんだ調子で、宮殿の前に語りあつた。

船着では、日のあたる中に烈しくかゞやき、銀色に光つて居る礁のつゞいた碧色の海に見馴れない橙色の帆が動いて居る。それらは近所の島々の土人で、彼等の王様の最後の瞬間

――彼等の土地がフランスに確實に領有せられる瞬間に遭遇しやうとて急いでやつて來たのだ。

彼等は上方からの表示によつて、その知らせを得たのだ。一體何故といふに、何時も王樣がおかくれになるといふときには、山が日沒の折に定まつたところが黑いまだらでおほはれるのだ。

王樣は死んだ。そして大元帥の制服をつけて公に宮殿に安置された。

其の場で私は王妃のマラーユ Maraü を見た――これは王妃の名である――彼女は王樣の部屋を花や織物にて飾つた。――公務の世話役が私のところへ葬式の裝飾上の準備の相談に來た

ときに、私は彼に王妃をすゝめてやつた。王妃は彼等の種族の美はしい本能で以て何處も某處も自分の周りを氣持好くこしらい、自分の觸れるところのものは何でも皆一つの藝術品にした。

けれど最初に會つたときに私の彼女を理解したところはほんの不完全なものだつた。私が彼女に望んで居たものとは非常にちがつたものであつた人間と事物、それらは私の迷を解いた。私はこの全くの歐羅巴風のくだらない事に嫌惡の情をおこした。然しある歐羅巴輸入の贋美術的糞土のうちにざれだけ國民性、特有性、又は原始的美といふものが、この征服された人種の間に保存せられてるかを見ることが出來るやうに

暫時留つた。私はまだ多の點に於て盲目だつたのだ。私はこの最早多少成人した王妃に於ても亦唯氣高い美しさの跡のある普通の肥つた女としか見なかつた。然し私が後にまた彼女を見たときには最初の判斷を變じた。私は彼女のマオリー人特殊の魅力の刺戟にまけた。いろ〳〵の雜種にもかゝはらず彼女にはタヒティ本來の型は純粹に殘つて居た。それで彼女の祖先、偉い頭領のタティー Tati に對する回想が彼女にも、彼女の兄弟及びその全家族に對すると同樣に眞當に偉大なるものの見榮を與へて居た。彼女はその人種の容儀正しい立派な姿をなし、大きく、若かも優美である、腕は寺院の圓柱のやうに單純ですつきりして居る。それから全體の體軀の造り、眞

直な肩の線、上へつき出て居る頭は思はず聖なる三位、三位一體のシンボォルを想はせた――彼女の眼には時たまぼうと浮んで來る熱情のひらめきが見える。それが烈しく燃え、周りのすべてのものを燃えたゝす――恐らく島自身もかつては大洋から頭を擡げ、その上の樹木が最初の日の光にかゞやいたやうに。

ありとあらゆるタヒティの人は皆黑の裝束をし、二日の間悲しみの曲、死の調を歌つた。私にはそれが激情的なソナタをきくやうであつた。

それから葬式の日が來た。

朝の十時に行列が宮殿を出た。白い冑、黑い衣の兵隊と役

人、それに喪服をつけた土人とである。すべての地方々々の人民も列次をなして進んだ。そしてその各地方の指揮者はフランスの旗を擔つた。

アルイ Aruë でとまつた。そこには名狀することの出來ない紀念碑、セメントでつながれた石の見惡い堆積が突立つて居る。それが周圍と氛圍氣とに對して痛ましい對照をなしてたつて居る。

ラカスカアデは先例に從つて演說をした。それを通譯が列席のフランス人の爲めに飜譯をした。それから新敎の牧師の說敎があつた。それに王の兄弟のタティーが二三言答禮をした――それが全體であつた。人々は散じた、役人達は馬車に

押しあひ突きあひ入りこんだ。それがかう何か「競爭の歸り」の樣を想はせるやうであつた。

フランス人がその風習に全く無頓着になつたその時、四五日こつち眞面目になつて居たこれ等の人民は再び喜悅を見出した。彼等の頑丈な跣足が道路の塵埃をふきまくりながら、ワヒナ Vahina はまたタネー Tanè の手をとり、元氣好く話し、前後に腰をゆすぶつて步るいた。

ファテュア Fatiia 河の近くで皆が散り〳〵になつた。石と石との間に隱れて、此處彼處に女達は帶のところまで上衣をまくりあげて、腰や、步行と熱さから汚れた脚をきよめる爲めに水の中に屈んだ。かく淨められて、女達はモスリンの布がそ

の上に括られてある、その胸を突きだし、若い丈夫な動物の美しさと彈性とを持して、堂々と再びパペエテへの道を行いた。まぜもの〻、半ば動物性の、半ば植物性の香、彼等の血とくちなしの花の香――ティアレ Tiaré――が彼等から流れて來る。それを皆が髮につけて居た。

――Téiné merahi noa noa（今や芳ぐばしい香がする）と彼等は歌つた。

＊　＊　＊

……私が病らつて、パレオ Pareo たつた一つで床に横になつて居た部屋の中へ王女がやつて來た。眞當に地位のある婦人を迎ふる樣子ではなかつたのだ。

註――パレオとは土人の唯一の着る物のこと

――Ja orana,（御免なさい）Gauguin, 御病氣で居らつしやるの。私はあなたにお會ひしたくつて參りましたの。

かう彼女はいふた。

――あなたはどなたですか。

――ヴァイテュア Vaïtüa で御座います。

歐羅巴人が何でもかでも皆自分達の水平線まで押しつけてしまつた後に、なほ眞當の王女といふものがあるものなら、

ヴァイテュアこそそれだらう。勿論彼女は素跣足の尋常普通の人間で、耳の後には香のする花をつけ、黒い着物をつけて居た。彼女はポマアレ王樣の喪にあるのだ。彼女は王樣の姪であつた。彼女の父のタマトア Tamatoa は士官や役人達と餘儀ない交際もし、海軍提督の待遇はうけて居るが、彼は王族のマオリー、憤怒の紀念碑の中の戰好きの巨人、夜會の名取りの大酒呑以外のものにならうとは一度もしなかつた。ヴァイーテュアは彼に能く似て居るといふ評判であつた。

人を疑ぐるやうな薄笑が唇に動いた。私はこの島に上陸せる歐羅巴人尋常の圖々しさで以てこのやつて來た王女を觀察した。然し私は叮嚀でありたかつた。

――お出で下すつてありがたう。御一緒にアブサントでも頂きませうか。

かういふて、私は部屋の隅の方の壜を指差した。丁度私はそれを買つて來ておいたのだ。

別に不機嫌な樣子も嬉し相な樣子も見せずに、素直にその方に歩いて行つて、その壜をとらうと屈んだ。この屈んだとき、その輕るい透き通るやうな着物が腰の上にぱつと開いた、――その腰といつたら地球でもかつぎさうな腰であつた。眞當に王女らしい女だつた。彼女の祖先は? 傲慢で、勇敢なる巨人! 幅廣い肩の上には頑丈な首がのつかつて居る。初めには私は唯彼女の人間の肉を喰らう大顋、ものを裂き切るため

の廣い齒、陰鬱で、奸獰な動物の窺ふやうな眼差しを見たばかりだつた。彼女が奇麗な、立派な額をして居るにもかゝはらず、私はひどく見惡く思つた。

床の上に坐はるといふことが彼女に氣が附かなかつただけなのならば。勿論こんなに弱い臺が私達二人をのせることは出來ないのだが……

然し矢張り彼女は臺にのつた。

臺はみりみりと音がしたが、然し大丈夫だつた。

飮みながら私達は二言三言話をした。然し話は捗々しくは行かなかつた。到當彼女は話に倦んで來た。そして沈默が支配した。私は內々王女を觀察した。彼女は眼角から盜むやう

に私を見つめて居る、そして時はたち、壜は空らになる。ヴァイテュアは盛にのむ。彼女はタヒティの葉卷を自分で捲いて、それを喫ふために臺の上にからだをのばす。彼女の脚は全く機械的に始終下の臺の脚の木の上に屆いて居る。彼女の顏附はやはらいで來、見かけは弱々しくなり、その眼はかゞやいてくる――そして正しく間をおいた口笛がその唇をもれて來る――それが私には獸的な歡樂の思に耽つて居る猫の唸きをきくやうであつた。

私は大變變り易いやうではあるが、今私は彼女が眞當に奇麗だといふことを發見した。「あなたは私を好き」と聲音を振るはしていふたとき、大變な不安が私を襲ふて來た。王女は

際立つて美しかつた……

私の氣に入らうとする爲めなのは疑ふまでもないのだが、彼女はラ・フォンテエンの蟋蟀と蟻との物語を語り始めた――彼女を敎育した姉妹達の處に居た時分の小供の時の記憶なのである。

葉卷はすつかり灰になつた。

――あなた御存じなの。と王女はいふて、「私はラ・フォンテエンを好かない」とたちあがつた。

――どうして。あの善人のラ・フォンテエンを。

――多分あの人は善い方でせうけれど、あの人の道德は善くない。蟻……(女の口には嫌惡の樣子が見えた)。あ、あ、

蟋蟀、蟋蟀。唄え、唄え、何時もお唄え。

かういふて私を見向きもせずに、輝いた遠くを見入つた眼をして彼女は威張つて附けたした。

――まだ何も賣られなかつたときは、どんなに私達の國は立派だつたらう。年が年中何時も何時も唄ふたのだ……唄はう、何時も。何時も、何時も、與へよう……

そして彼女は行つた。

私はまた枕の上に横になつた。永らくの間 Ja orana, Gauguin といふ言葉が媚びるやうに私の心の中にあと鳴りをして居た。

ポマアレ王樣の死と共に私の思ひ出のうちにあるこの小話は、意外の事、社會上の事變として私の記憶のうちに深い跡をのこして仕舞つた。

パペエテの住民すら、土人も白人も直ぐ樣この死んだ人を忘れた。王樣の大葬に列するためにやつて來た近所の島々の土人もまた行つてしまつた。數千の橙色の帆は又も碧色の海を橫切つた。そしてすべてはまた何時もの步調に返つた。ほんの王樣といふものさへ最早なくなつた。

彼と共に古傳說の最後の跡は消えた。彼と共にマオリーの歷史は卷を閉ぢた。マオリーの歷史は終末に來た。文明――兵隊と商賈と官僚――が勝ち誇つた、遺憾ながら。

深い〳〵哀愁が私の心を支配して來た。タヒティに私を運んで來た夢は現實によつて酷たらしく追ひ捲くられた。私は昔のタヒティを愛した、今のタヒティは私に恐怖をおこさせた。然し私は未だに保存されて居るこの人種の肉體上の美しさを見たときに、彼等がその昔の偉大、彼等の人情や自然の風習、彼等の信仰、彼等の口碑のうちから何も持つて居ないさは、私は信ずることは出來なかつだ。たとへ彼等がこんなものを殘しておいたとしても、その過去の痕跡だけでもどうして發見することが出來ようか。何の道標もなしにどうして理解することが出來やうか。灰すらも散つてしまつたものから、どうしてまた火がとぼさるゝだらうか。

私は又こんなにずゐ分參へらされたけれども、私は決して私の計畫をすてず、標的に達する爲めにいきなり不可能といふこと自體を探求するのが何時ものことなのだ。

私の決心は直ぐにきまつた。私は自分を歐羅巴張りの中心から遠のけるために、パペエテを去らうと決心した。

若し私が草叢のなかに土人の生活を一から十まで彼等と共にするならば、段々とマオリー人の信用を得るやうになり、そして――やがては彼等を理解するやうになるだらうと感じた。

かくてある朝私は、自分の小舍を見附けるために、役人が親切に私のために用だてゝくれた馬車で出發した。

ティラィ Titi と呼ぶ私のワヒナは私をつれて行つてくれた。彼女はイギリスとタヒティとの混血兒で、いくらかフランス語を話した。この旅行には彼女は一番好い着物を着て、耳の後にはティアレ、上は紐で結すび、下には稈細工の花と橙色の貝殼の飾をした樹皮の帽子をかぶり、長い黑髮をほどいて肩の上からさげて居た。彼女は車で行くといふことが得意であつた。自分が非常に立派であるのと、又自分が偉い力があると思ふ男のワヒナであるといふ事とが得意であつた。そしてその得意の中で彼女は眞當に美しかつた。其得意には何等の馬鹿氣た風がなかつた。この容儀正しい容子は、この人種が支配せる遠き以前の歷史や、時を定めずあらはれた偉い頭領の系統を

記憶して以て、そのうちに輝ける誇りを有つて居るこの人種にはひどくふさはしかつた――彼女の大變心を配つた愛は、巴里の人の眼には賣物の娼婦の媚ほどにも天秤がきかなかつたといふことを私は眞當に知つた。然しマオリーの娼婦の情火は巴里の賣女の受動的なのとはまるでちがつたものであつた――眞當にまるでちがうのだ。彼等の血のうちには火がある、この本來の滋養分である戀情はそこに目醒め、そこに呼吸する。この眼、この口、利己であらうとなからうと、それは嘘を吐くことは出來ないのだ。この口、この眼から語られるものは何時も何時も戀情だけである。

路は豐饒な、しかし變化のない土地を通つて忽ちに進んだ。

右には何時も海があり、珊瑚礁があり、瀑がある。それは波が岩と非常に猛烈に突きあたるといふと煙霧を散らした。左には大きい森林を望んで草叢がある。

午頃には私達は十一里の餘も來た、そしてマタイエアMatai-ëaの地方に着いた。

私はあたりを見廻つた。そして到當可成り奇麗な小舍を見附けた。小舍の主はそれを私に貸してくれることにした。彼は自分が住まはうとした新らしい小舍をその側にたてた。

翌日の夕、私達がパペエテに歸つて來たときに、ティティは、私が彼女を一緒につれて行くのかどうかつてきいた。

——二三日たつて後で、私の準備が出來たなら、と私はいふ

た。

ティティは澤山の愛人を地下に葬つた後、パペエテでは恐ろしい評判を有つて居るのだ。然しこのことが私を彼女から遠のけはさせなかつた。彼女は半白色人として、又根深い、本來の、純粋のマオリー人の特徴を有つてるにもかゝはらず、いろ〳〵の關係からしてこの人種の目印になるものをずい分多く失なつて居た。私が知りたかつたものは何にも彼女は敎へることが出來ず、又私が慾求した選りに選つた幸福を何も私に與へることは出來ないと私は感じた。

その外に、私が探し求めて居るもの、選擇を要するものを私はこの土地で見出すだらうと私は自分にいふた。

一方からは海、一方には山脈、分峰をなした山脈、大きい谷がある。谷を岩に倚つた高い竹がおほふて居る。

山と海との間にブウラオ木造りの私の小舎がある。それと列んで、住みはしないが第二の小舎がある、フアレ・アム(食堂)Faré amu なのだ。

朝。

海には岸邊に近く、私はヒローヂ Piroge と、そのなかに半裸

＊

＊

＊

の女を見る。岸邊には男が居る、之も同様に裸だ。萎ほれた葉のついた勢のないココスヌス kokswlsr (胡桃の一種)は金色の尻尾をたれ、房を爪の中に有つて居る法外に大きい鸚鵡のやうだ。男は調子の好い恰好をして兩の手で重い斧をあげる。それは上では銀色の空に碧色の跡をのこし、下では伐り倒された樹幹に薔薇色の截目をのこす。その時、毎日々々貯へられた數百年の熱火は瞬時の炎にまた復活する。

註——ピローヂさは土人の樹の幹で作つた輕るい小舟のこさ

紫色の地面のうへの金黄色の永い蛇形の葉は私に神秘な、宗敎的な古經典の筆附きを想ひおこさせた。葉ははつきりとオーストラリヤ語源の聖語アテゥア ATUA ——神——タエータ

Taäta, 又はタカタ Takata, 又はタタガタ Tathagata の形をして居た。それは全印度到るところを支配して居たのである。そして奇麗な靜寂と美はしい清貧とのうちに神秘なる慰めのやうに私は賢者の言葉を思ひだした。

タタガタの眼には立派な王者大官の威容も塵にすぎない、埃にすぎない。

彼の眼には清純も不純も六のナガス Nagas の舞踊のやうだ。

彼の眼には佛を拜したい求めも花を求むるのに等しい。

ピローデでは女は綱をなほして居る。

海の碧色の線は珊瑚礁に碎ける去來する大波の線にこはされる。

夕暮。

私は葉巻を喫えに、海岸を歩いた。

とく水平線に沈んでゆく太陽は私の右手に橫はるモレアの島の後にすでに半をかくした。その突き出た所が尖塔を有つた古い城のやうな山は黃昏のなかに黃色の夕燒けでくつきり黑く影を描いてたつた。

人の心の支配者である幻映がこの自然の建築の前に自分を追ひやつたといふことは何の不思議もないことだ。地上にはその山嶺は巨大な冑の姿をなして居る。その音は大勢の群集の騷擾のやうにひゞく、あたりに打ちよせる波は一度もその山嶺にとゞくことはないだらう。この廢墟のうちに冑は只一

つたつて居る。それは守護神であり、證人であり、天空の隣人である。私は上方にある頭から水の中に秘密の眼差を浸して居るのを思ふ。それはかつて罪ある人間の種族を轢うつたものである。その口である廣い隙間から、私は反語と同情との笑の水の上に漂ふのを知る。水、そこに過去はねむる。——夜は急いでやつて來た。モレアはねむつた。

＊

＊　＊

靜寂！　私はタヒテイの夜の靜寂を知つた。

靜寂のうちに私の心臟の波打つの丶外は何も私は何もきかなかつた。

私の小舍の前に同じ間隔をおいて立つて居る竹を通して私の床の上まで月の光が差しこんで來た。そしてこの似通つた外見が私の心のうちに樂器、昔の人の竹笛の面影を喚びおこした。それはマオリー人に知られ、彼等からヴィヴォー Vivo と呼ばれたものである。月と竹とがそれを大きく圖にした。丁度それは晝は終日默つて居る、然し夜は月のお蔭で夢見る人のその記憶のなかに愛らしきメロディーを想ひおこさせる樂器のやうに。私はこの奏樂のかたへに眠りについた。

空と私との間にはパンダアヌス Pandanus の葉の高い、輕る

い屋根の外何もない。その屋根には蜥蜴が巣をつくつて居る。
私はかの牢屋、歐羅巴風の家から遠くはなれて居る。
マオリーの小舍は生命、空間、無限……から人間を離間しはしない。
とはいへ私はそこに非常な寂寞を感じた。
この地方の人達と私とはお互に双方から觀察しあつた、そして私達の間の隔りは同じであつた。
二日目から私の貯蓄はなくなつてしまつた。どうしやうか。金錢で何でも必要なものは皆見出せると私は信じて居たのだ。然し私は欺かれてた。人々は都會を去るや否や、生きんが爲めには自然に頼らなければならないのだ。自然はゆたかであ

る、自然はしみつたれではない、そして誰にもその寶物の分配を拒ばまない。それらは無盡藏に木に、山に、海に貯へられてある。然し人々は高い木に攀じ、山に登り、重い獲物を擔ふて返ることを知らなければならない、人々は魚を捕へ、水に潛り、石にかたく着いてる貝を海の底ではがすことが出來なければならない——人々は知らなければならない、出來なければならない。

私、文明人である私はこの點に於て遠く土人の後にたつて居る。私は彼等を羨やんだ。私は私の周りに日々の需要以上には大した骨折を要しない——金には少しの心配もない——彼等の幸福なる、平和なる生活を見た。自然の產物がすべて

の人の使用に供せられてる處に、誰から何を買ふのだらう。
私が空腹をかゝへて私の小舍の閾に坐り、氣を落して私の境遇と、自然がそれ自身と文明人との間においた先きの知れない、恐らくは打ち超えることの出來ない障害を思ふてた時——その時私は何か身振りをしながら私に呼びかけて居る一人の土人に氣がついた。その大變に表現にとんだ擧動が言葉の役をたした。そして私は私の近處の人が私を食事に招くのだといふことを知つた。首を振つて私はことはつた。私はその申出をことわつたけれども、それを受取つたのと同じに思へたので、私は愧ぢて小舍の中に歸つた。
四五分後に小さい女の兒が何もいはずに煮た野菜と、水々

した摘みたての綠の葉で奇麗に蔽はれた果物を私の小舍の前に置いた。私は飢えて居た。そして同じやうに何もいはずに、私はそれを受取つた。

直ぐ後で先きの男が私の小舍の前を通つたが、立ちとまらずに笑ひながら尋ねた

——Païa ?

「お前はもう充分か」といふことゝ私は推測した。

これが私と蠻人との間の相互の信用の初めであつた。

「蠻人！」、私がこれらの人肉を喰らう齒を有つた黑色の人間を見たときには、この言葉は思はず私の唇のうへにやつて來た。然し私は直ぐに彼等の正しい、彼等の珍らしい愛嬌を認

めた……たとへば温和な下向きの眼を有つたあの銅色の首、ギローモン Giromon の大きい葉の繁の下で、ある朝私に隱れて見て居たが、私の視線が彼のと出會うと、逃げて行つたあの小供のやうな……

彼等が私にとつて觀察の對象であり、驚愕の原因であるやうに、私は又彼等にとつてそうであつた。何も知らなかつた人にとつてはすべてのものは新らしかつた。何故といふに私は彼等の言葉も、彼等の習慣も、又最も單純な缺くべからざる手業すら出來なかつたのだ。――彼等の各自が私にとつて蠻人であるやうに、私は彼等の各自にとつて蠻人であつた。

そして私達双方のうち何方が正しかつたのだらう。

私は働かうと試みた。そして各種のノートやスケッチを作つた。

然しその強い純粋な色をした景色は私を眩惑し、私を目暗にしてしまつた。私は何時もおちつかなかつた、そして求めに求めた……………

そして私は見たまゝを單純に描き、多くの思慮なしに青のそばに赤をおくのであつた。小河や海岸の金に色彩られた姿は私を恍惚とさした。何故私は畫布の上にこの太陽の歡喜を捕へることを躊躇したのだらう。

この古い歐羅巴張りの傳習よ。頽廢せる種族のかの恐るべき表現法よ。

タヒティの人の顏附の本來の特色といふものを修得する爲めに、私は近處の女、純粹のタヒティ系の若い女の肖像を作らうと思つた。

その女は一日、私の小舍に來て、私の部屋の壁を貼つておいた畫の寫眞を見やうと思ひたつた。その女はそれらを永い間見てた、オリンピアをば全く特別な興味を以て見てた。

――それをどう思ふ？と私はその女に尋ねた。（私は最早フランス語を話さなくなつた二月で僅かのタヒティの言葉を覺えた。）

近處の女は答へた

――この方は大變綺麗ですわ。

私はこの批評を笑つた、そしてこの女は私の心を動かした。それならこの女は美といふことに對して理解を有つてるのだらうか。美の藝術の學校の先生達はそれに何といふだらうか。思索といふことが先きにゆき勝ちな感動せる沈默の後に、この女は突然附け足した

——奥さんでいらつしやるの？

——あ。

私はこの虚僞を避けなかつた。私、美はしきオリンピアのTané.

この女が珍らしそうにイタリア原始の二三の宗敎書を見て居た間に、私は急いで、その女には見せずに、その女の肖像

をスケッチし始めた。

その女はそれを直ぐに見付けて、すねて叫んだ――Aïta!(いけない!)そしてそこから驅け出した。

一時間の後にはこの女が綺麗な着物を着け、耳の後にティアレをつけて又そこに居た――それは氣に入らうとすることからなのかしら。一旦拒んだのちに自から進んで許すといふ喜悦からなのかしら。若しくは單にそれは人々が自分自身にそれを抑制して居る禁制の果の誘惑であつたのか。若しくは又もつと單純に何等外の理由のない、マオリー人がその女をそうしたほんの氣紛れなのかしら。

猶豫なしに私は仕事をした、猶豫なしに、そして熱心に。

畫家としての私の仕草にモデルの物質上並に道德上の服從、急激な、沈默せる、否定することの出來ない同意といふものが屬して居るといふことを私は覺えた。

私達の美學上の法則によるとこの女は餘り美しくはなかつた。

然しこの女は美しかつた。

この女の顏附はラフアエル流の調和のあるものであつた。唯一つの動く線のうちにすべての喜悅とそしてすべての苦痛とをおくことを理解して居る彫刻家はこの口をモデルにしたのだ。

私は急いで、情に激して仕事をした。何故といふに私はま

だその同意に賴るわけには行かなかつたから。私はかの大きい眼のうちに未知の人に對する恐怖、願望、各種の歡樂の底にある若い經驗の憂鬱、丁度我慢といふことの我儘でない、氣高い感情のやうなものを讀むことを恐れた。こんな人間が私達に服從するならば彼等は私達に敗けるのである、然しそれは彼等自身の意志に敗けるのである。超人間的のもの――若しくは恐らく神格的獸性を有つてるところの力がこの女を支配してる。

＊　　＊　　＊

今は前より樂に、具合好く働けるやうになつた。

然し自分の孤獨といふことが私を苦しめた。私はこの土地で靜な眼差をした全くの若い女や處女、血統の正しいタヒティの女といふものを見た。若かもそのうちの二三の女は恐らく喜んで私とその生活を分つてくれたであらうが。——然し私はそれらの女達を說き伏せることを能うしなかつた。それらの女達はその確かりした、ぐらつかない眼差と、その動作の品位、容態振つた態度とを持して事實に私を臆病がらせた。

そうとはいふもの丶すべての女といふものは捕へられたが

つてるものだ。若かもそれが一字を足さず、文字通りに獸的に擱へられ(marii)たがつてるものだ。すべての女といふものはしたい放題にされるといふことに不思議な慾望を有つてるものだ。何故といふにこの種の男性の權威といふもの丶所作を通じては女子の意志は全く責任を有しないものだから——一體全體永續きのする戀の發端に於てさへ女子の意志表示といふことはなかつたものだ。初めてこんなに激しく動かされたこの力には深い意味がその底にあるといふことは、あり得ることだ。あの女達が飾らない、有りの儘の魅力を有つて居るといふことも、亦あり得ることだ。私はこんなことをうまく考へた。然し私は能うしなかつた。

それから又あの女達の多くを病氣だ、野蠻人に文明生活の第一階段として歐羅巴人から運ばれて來た、あの病氣といふものから襲はれてるのだと人々は思つた……

それで老人達が女達の一人を指して私にかういふたときに、——maii tèra（これをおつれなさい）

私はなくてならない大膽といふものも、信用といふものも有つてなかつた。私がその女をよろこんで引きとらうといふことを私はティティにいはした。

女はすぐに來た。

試は不幸に終つた。そして私は役人達の平凡な奢侈に慣れたこの女と一緒に居て感じた倦怠で、野蠻人の美はしい生活

の間で既に私が如何程の進步をしたかといふことを私は測ることが出來た。

二三週間たつた後でティティと私とは永久にお互に別れた。

私はまた一人になつた。

近所の人達は私と友達になつた。私はその人達と同じやうに喰べたり、着たりずる。私が仕事をしないときには私は無邪氣と喜悦との彼等の生活の仲間入りをする。その彼等の生活といふものは時とすると俄に眞面目になる。

夕には人々は群をなして繁つた叢林の根もとに集まる。それを藏へかぶせて椰子の木の梢がかきむしられたやうにひろがつて居る。男も女も、老人も小供も一緒になる。そのうちであるものはタヒティの血統のもの、外のものはトンガス Ton-

gas の島や、又外のものはマルクェサス Marquesas の島のものである。彼等の體軀の活氣のない調子が葉が織物のやうに重なり合つたのによく調和して居る。そしてその銅色をした胸から打ちふるへながらメロディーがかたまつてくる。それが椰子の木の無細工な幹から濕り氣を帶びて投げ返へされる。それはタヒティの歌、イメネス Iménés である。

一人の女が始める、その女の聲が丁度翔け登つてる鳥のやうにたかまり、そしてあらゆる調子を通つて音階の最も高いところに行き、強い調節をなしてたかまつたり、しづんだりし、そして到當お仕舞には外の女達の聲を壓して翔け廻ぐる。それがさてその女達の方では翔け廻つて、まあいはゞその女

に從ひ、忠實にそのお供をしてるやうなものだ。咽喉から突きだすやうな、野蠻な唯一度の叫びで、到當すべての男達が一緒にその歌を終はる。

時々お喋舌りや歌うたひに小舍に集まつて來る。祈りを以て始められる、老人がそれを大概先きに唱へる、そしてその座に居るすべての人達がそれを繰返へす。それから唄はれたり、又は可笑しい話が物語られたりする。これらの物語の內容といふものは大變微妙なもので、なか〳〵摑めない。それは彼等の純朴によつて織物のなかにちりばめられた纖巧な部分で、それが彼等をよろこばすのだ。

たまには眞面目な問題や賢い議案の審議をする。ある晩な

どは次のやうなことがなされた。それを私は驚かずには聞けなかつた。

――この私達の村には、と一老人が語りだした、此處彼處に倒れた家屋や崩れはてた壁や朽ちて穴の開いた屋根などが見える。時たま雨でも降らうものなら、そこから濕氣が入りこんで來る。何故だらう？人は誰でも皆風雨の前に守護される權利を有つてるものだ。その屋根を修繕するには材木にも木の葉にも缺乏して居る。私はかう建言する。最早住むことが出來なくなつた小舍の代りに共同して廣い丈夫な小舍を建てることを。私達はそれを片端からやつて行きたい。

その座に居たすべての人達は取り除けなしに喝采を以て彼

に報ひた。

この老人の動議は衆口一致を以て受け容れられた。悧巧で善良なる國民、かう私はその夕私の小舍に歸つたとき思つた。

然しその翌日私が昨日議決された仕事の開始を知らうとしたとき、私は最早誰もそんなことを考へてないといふことを知つた。毎日の生活は又常道をふんで行つた。そしてかの賢い建言者から指示された家屋は以前のやうに倒れたまゝになつて居る。

自分の問には私は唯微笑を以て答にした。

然し皺のよつた眉が幻想的な額の中に意味ありげな線を引

いた。

私は自分の心を惑はした、然し立派な敎訓を野蠻人から受けたといふ感情を以て。彼等が老人の建言に承諾を與へたといふことは眞當に當然なのだ。恐らくその決議をそれ以上に遂行しなかつたことも亦當然なのだ。

何の爲めにするのだ。神樣は自然の財寶をその忠實な信者に分ち與へてやらうと、そこにお居でになるのだ。

——明日は?

——恐らく!それは然し又大丈夫だらう、太陽は今日と同じやうに明日も晴やかに、悪深く登るだらう。

それが疎忽、輕るはづみ、うはずつてることなのか。それ

とも又恐らく深い哲理のあることなのか——誰が知らう？まあお前さん達はその贅澤にお氣を附けなさいよ。用心深いといふ口實で、そこに趣味を見出したり、それを大切と思つたりすることをお氣を附けなさいよ。

生活は毎日段々よくなつて來た。私はマオリー人の言葉を今は可成り好く解かるし、又そう骨折らずに直ぐ話すことが出來るやうになつた。

私の近所の人達は——三軒は全く近くに、外の多くは各々に多少隔つて——私を自分達の一人として見るやうになつた。

砂利礫と續け樣に始終觸れてるので私の足は堅くなり、地(ち)面(べた)に慣れて來た。殆斷えず裸な私の體軀は最早太陽の下に居

ても苦しくはない。

文明といふものが私を段々去つてゆく。

私は單純に、隣人に對しては唯餘り嫌味——彼を愛するといふよりは寧ろ——を感じないだけに考へるやうに始めた。

私は生活上のあらゆる歡喜——動物的にも、人間的にも——を味はう。あらゆる虛構、あらゆる傳統、あらゆる習慣から自由である。私は眞理に近き、自然に來たのである。目前に今日といふ日を有つてるやうに、確かに自由な、美はしい日が續いて、私に平和を降してくれる、私は正則に發達し、そして不必要な事柄に自分をつかはない。

私は一人の友達を得た。

彼は自分から私のところへやつて來た。そして下等な利己といふことが彼をそのことに促したのでないといふことは確なんだ。

それは近所の一人で、素直な、大變可愛い、若者なのだ。私の色着きの繪や木彫りが彼の好奇心を呼びおこした。彼の問に對する私の答が彼を敎へた。彼が私の繪畫を描いたり、彫刻をしたりして居るのを眺めてない日とては一日もなくなつた……

今になつてなほも、こんなに時のたつた後でも私は喜んでこの眞實で無垢な自然のうちに呼びさましたあの眞實で無垢な感情を憶ひおこす。

夕に、私が自分の仕事をやめて休むときには私達は一緒に語り合う。彼は好奇心を有つた若い野蠻人として私に歐羅巴の生活、殊に戀事を尋ねた。そして一度ならず幾度も彼の問は私を當惑させた。

然し彼の答は彼の問よりもなほ一層純朴(ナイーヴ)であつた。

ある日私は彼に私の道具と木を一つやつて、彼に彫刻の試をさせやうと思つた。當惑し、默つて彼は初めは私を見て居た。それから彼は私に木と道具とを又返へした。そして素直に、正直にかういふた、私は外の人とはちがう、それは外の人には出來ないことであり、又外の人が必要である事柄を私は解かつた、と。

ヨテファ Jotéfa はかう私にいふた最初の人間であると私は信ずる——、それは野蠻人か若くは小供の言葉である、一體人といふものは二のうち一でなければならないのだ、そうぢやないか、藝術家が——大切な人間であるといふことを信ずる爲めには。

*

*

*

あるとき私は自分が彫刻をするのにバラの木が入用だつた。私は質の積んだ、堅い幹がほしかつた。そしてヨテファに相談

した。

――山へ行かなければなりません、と彼はいふた。私は澤山好い木のあるところを知つてます。若すおよろしければ、お連れ申しませう。貴方のお氣に入つた木を倒して、それを一緒に擔いで參りませう。

翌日早く私達は出發した。タヒティの道路は歐羅巴人には可成り困難なものだつた。それに山路をするといふことは土人にさへも辛抱努力といふことが要るのだ。そんなものなんか要らないとは土人も思つては居ない。

二つの山、攀じ登れそうもない二つの嶮しいバザアルトの壁の間に裂目が開けて居る。そのなかを水が石塊の間を縫ふ

て流れる。その石磈は清水に道を開くために側の壁から崩れたものだ。小河にさ大きくなつてゆく清水は石磈をこつき、ゆるがし、到當いくらかづつ押しやつて、小河が急流さなり石磈を引拐つて海へ運び去つてしまふ。この小河のどの岸にも雜木、Brotbaümen（バンダネの木）Eisenbaümen（羊齒屬）Bouraos, Kokosnusbaümen（椰子）Hibiscus（錦葵科）Pandanus（榮蘭科）Guava-baümen, Riesenfahren の籔や、島の中央に行けば行く程段々深く密生し、到當行くことの出來ないやうな叢林になる雜草の間を通じて道のやうなものが、ところどころ立派な瀑にさぎられて、通じて居る。

私達は二人共裸で、薄青色のパレオを纏つて、手に斧をも

つて行つた。そして道を切り開くために幾度も小河を横切らなければならなかつた。その道を私の先達は眼を以てよりは音を以て發見するやうに思はれた。何故といふに草や葉や花が夥しく群がつて地面を全く蔽へて居るのだもの。

全くの靜寂が支配して居る。岩にする水の訴へるやうな音や、一樣の調子の響や、優しい、低い嘆聲のするにもかゝはらず――いや、それが靜寂を導いて來るやうに。

この森のなかに、この寂寥、この靜寂のなかに私達二人だけ居る――彼、全くの若い男の彼と、私、まあ年寄な、いろいろの幻影に心臟の弱々しい呼吸が奪ひ去られ、いろ〳〵の努力骨折が體軀を衰へさせ、物質的にも、道德的にも不健全

な社會にその罪業、この老衰せる因果の遺産をのこされた私と！

Androgyne の姿の動物的に矛盾な温情を持して彼は私の前を行く。私は周圍の植物の光輝が彼のうちに具體化して閃めき、生きてるのを見るやうに思つた。

私の前、そこを行くのは、それは人間なのだらうか。彼の性質の單純さ複雜さが同時に私の心を惹いたのは、それはあの小供らしい友達なのだらうか。恐らくこれは森自身ではないんだらうか、靈魂（たましい）のある森、無性のそして――人の心を搖かすそれではないんだらうか。

これらの裸體の人種にあつては兩性の差異といふことは、

丁度動物に於けるやうに、私達の風土に於けるとはちがつて著しくないのだ。帶と胴當とで私達には女性から變態、人爲的性質といふものを作るやうになつたのだ。人爲的性質とは自然をして、遺傳の法則に從つて私達を複雜ならしめ、薄弱ならしめたものだ。それを私達は心を配つてその情緒の弱々しさと不充分なる筋肉の狀態に維持して居るのだ。即ち私達はその性質を疲勞といふことで守り、そしてその性質から發達といふ機會を奪つたのだ。そこで私達文明國の女といふものは、姿が好いといふ奇態なる理想に依つて作られて——そこに私達も往々にしてこだはる——彼等女性は私達男性と共通するものを何も有たない。それは恐らく眞面目な道德的、

社會的の不都合といふことなしにはとゞまらないのだ。

タヒティに於ては森や海の空氣が肺臟を丈夫にし、肩幅や、腰を廣くする。男も女も太陽の光線、海岸の砂利礫から決して容赦されない、彼等は同じ仕事を一緒に同じ勤勉を以て、同じく得心して働く。そこで女に男性的のところがあり、男に女性的のところがある。

この兩性の近似といふことが兩性間の關係を輕める。そして何時も裸體であることが、その風習に自然のまゝの無邪氣と全くの純潔とを與へる。何故といふに人の心が危險なる神秘に心を勞するといふことがないからである。それは幸福な僥倖といふことを意味あらしめるものだ。そして彼等には文

明人の間にある戀事といふことの內密な、濆れた性質がないのだ。男と女、戀する人としてよりは伴侶であり、むしろ友達である男と女は喜悅と勞苦のうちに殆たえず一緒に生活し、そして罪過といふことに就いてはその概念さへも彼等は知らないのだ。

香と光とに醉ふて、老ひたる文明人の心に今や突然新奇と未知との魅力を以て僅かばかりの兩性上の差異にもかゝはらず、かの恐るべき慾望が何故おこつたのだらう。

私の顳顬のところが動氣を打ち、膝がわく〳〵した。

然し道が行きつまつたので、私の道連れは小河を横切る爲めに身を轉じた、そのとき私の方を向いた。アンドロギーネ

は消えた。私の前を歩み行くのは、それは眞實の若者であつた。彼の平靜な眼は流れの潤のある明るさを有つて居た。直ぐ樣又和平が私の心にやつて來た。

私達は暫らく休んだ。私は感覺的よりはむしろ精神的の限りない快感を、私が奇麗な水に浸つたときに感じた。

──Toe toe（これは冷たい）とヨテファがいふた。

──いゝや、と私が答えた。この叫び、私が全く頽靡した文明に對して今や心のうちにおこして居たその戰の最後に適したこの叫びが森のなかに大きい木精を呼びおこした。そして私は自分にかういふた、自然は自分の戰つたのを見た、自然は私の心の言葉をきゝ、それを理解した。何故といふに今

自然は私の勝鬨に、自然はこの試練の後に私を彼女の小供の列にとり入れることを欲するといふ、はつきりした聲を以て答へてくれた。

私達はなほ前進した。そして私達は激情的な熱心を以て益深く草叢のなかに進み入つた。丁度それに依つて私がこの大きい、母らしい自然の心臓のなかに突き入り、そして私が自然の生ける要素と一つになることが出來たやうに。

平靜な眼差をして私の道連れは何時も同じ歩みを私の前に運ぶ。彼は何等の疑念なく、私は汚れたる知識の責苦を一人擔ふ。

私達は目指す場所に着いた。

山の嶮しい岩壁が段々に平になつた。樹木の密生した幕の後に、隱れてといふ方がよさそうに、高地がひろがつて居た。然しヨテファは位置をよく知り、驚く程確に私を案內した。澤山のバラの木がそこに彼等の頑丈な枝をのばして居た。私達は最も美事なのを斧を以て倒した。そして私の注文に合う枝をとる爲めに木全體を犧牲にしなければならなかつた。木の倒れるのが私を愉快にさせた。心のうちに眞當の滿足と嬉しい昻奮とを感じて、私はこの神々しきまでに亂暴な慾求をみたすべきかを知らなかつた。私は手を血に汚した。私は樹木を征服はしない。私は彼を屠り盡くさうとは思はない。然しそうはいふものゝ私は地面にこの木が倒れると又他の木

に私の斧にする響をよこんできいたのだ。
そして私の斧が反響する撃音の節をつけて私に語つたところはかうであつた。

森をすつかりお前は倒さなければならない。
惡の森をすつかり無にしなければならない、
その萠芽は毒のある呼息をお前にふきこむ。
お前のうちにある利己の愛を打ちくだけ。
惡を打ちくだき、それをふみにじれ、
秋のロトスの花のやうに！

眞當にこの時から年老ひた文明人は消えた、死んでしまつ

た。私は生き返つた――恐らく別の人間が、無垢な、强い人間が私の心のうちにたちあがつた。

この恐ろしい發作は文明との、即ち惡との最後の訣別であつた。すべての凋落せる心の奥底に眠つて居る頽廢された本能のこの最後の證跡が、この對照に依つて、それを以て第一歩をおこした、この生活の健全なる單純といふことを、言語に絕する喜悅の感情にまでたかめたのだ。

慾深く私はこの美しい、汚れない空氣をすうた。この時私は別な人間だつた。眞當の野人、純粹のマオリーであつた。

ヨテファと私はマタイエアに歸つた。氣を附けて、一緖に重いバラの木の荷、noa, noa！を擔いで！

私達が大變疲かれて小舍に着いたときにはまだ太陽は沈まなかつた。

ヨテファは私にいふた。

——Paia?（滿足）

——あ、と私は答へた。

そして私の心の奥底で私は自分に繰返した。

——あ！

私は何時だつて勝利と復活の香 noa. noa! を吸ふことなしにこのバラの木に彫刻をすることゝてはなかつた。

プーナルーPunaruの谷——タヒティを二つの部分に分つ深い裂目——を通じて人々はタマノユTamanoiiの高地に達する。そこからディアデムDiademオロフェナOroféna, アロライArorai——島の中央を見ることが出來る。

人々は私にそこの不思議を話した。それで私は一人で行つて、そこに二三日逗留しやうと企てた。

——然しあなたは夜はどうなさるのだ!

——テッパパユスTupapaüsがあなたを襲ふだらうが?

——人は山の御靈を邪魔してはならない。

……お前は氣が狂つたのだ！

註 Tupapaüs とは死んだ人の靈魂、惡鬼、夜魔のこと。

私は恐らくそうなんだらう。一體タヒティの友達の心をおどろかした不安が却てなほも好奇心を煽りたてたゞけだ。

ある夜私は未だ明けないに出發した。

殆二時間私はプナールー河の岸の小徑を辿ることが出來た。然し私はそこで幾度も河をこさなければならなかつた。兩側に嶮しい岩壁が大きい石塊や柱に支へられて、流れの眞中まで突き出て居る。

到當河の中央を私の道をすゝめるといふ外なくなつた。水は膝のところまである、往々にして肩までもある。

下から見ると驚く程高く、上方で大變近く接して居るやうに見える兩壁の間に太陽は眞晝中殆ど見ることは出來なかつた。午頃に私は濃青色の空に光つて居る星を見つけた。
五時、暮れかゝつた頃私はいくらか疲かれて、右の方に、羊齒、野生のバナナ、ブウラオの草叢のある稍平な土地を見た、そのとき私は夜は何處に過ごさうかといふことを考へだした。私は幸福にも僅かの熟したバナナを見つけることが出來た。そして食事をとゝのへる爲めに薪火をした。
そこで私はバナナの木の一番下の枝の上に寢に橫になつた。それはうまい具合に行つた。そしてバナナの木の葉を雨の用心の爲めに編みこんだ。

寒かつた、水の中を歩るいたあとなので惡冷がした。眠は惡かつた。

然し朝はもう遠くはない、そして人間も獸も恐いことはないといふことを知つた。此處タヒティには猛獸も毒蛇も居ない。唯一つの野生の獸は野原に自由に生きて居る猪である。私は高々私の脚をおそはれるくらゐを恐がればいゝんだ。その爲めに私は手に斧の柄を握つて居た。

夜はくらかつた。黑白を分つことは出來なかつた。そこに私の頭に近く燐光を發する粉のやうなものがある、それが私を不安にした。テッパバユス、眠つて居る人を襲はふ爲めに暗のうちに目醒めて居るといふあの惡鬼のマオリー人の話を考

へて笑つた。彼等の領分は山の心腹にあつて、森が永遠の蔭にそれを蔽ふて居る、そして彼の領土はすべて死んだ人の靈魂によつてたえずひろめられる。

惡鬼の住む土地に生くる人よ、悲しきかな！

私はこんなに狂勇であつた。

私の夢想は勿論甚だしく調子が高まつて居た。

この光つて居る粉は小さい特種の香菌類からおこつてくるのを、今私は知つた。それは丁度朽ち腐つた枝の濕つた場所に、私が轉火材に用ひたあれのやうに生えるのだ。

次の日は私は早朝又道をすゝめた。

小河となり、急流となり、瀑布となり、始終移り變つた姿

になる流が不思議に氣六ケしく曲つて、時々は逆流するやうに見える。私はたえず道を失つた。幾度も枝から枝へ手を以てからだを前へやらなければならなかつた。その時地面にからだのふれることは稀である。水の底から法外に大きい蟹が高く私の方を見て居る。それがかういふやうに見える、「お前はこゝで何をするんだ」――そして百年もすぎた鰻が私の近くをにげる。

角を曲ると突然私は、岩の尖に若い、裸の小女のもたれて居るのを見た、それはそこにとゞまつて居るといふよりは、むしろ兩手を以てそれを可愛がつて居るのだ。非常に高くから石の間にさら〳〵と音をして低く流れて居る泉から小女は

のむ。

それをのんだ後、兩手に水を汲んで、胸の間にそれを流す。そして——私が唯の少しも音をさせないのに——それは本能的に危險を嗅ぎだす臆病な羚羊のやうに頭をたれて、私が動かずにたつて居る草叢の方を見る。私の眼は小女のとは會はない、然し小女は Taëhaë!（おゝ、ひどいこと！）と叫んで水にもぐる、その時にも私を見出し得ない。

私は流をかきませた、誰も、何もない——川底の小さい礫の間に腹ばつて居る大きい鰻だけだ。

骨に骨を折つて私は到當アロライ、恐がられて居る聖山の頂き近く着いた。

それは夜であつた、月はあがつた。月が山の荒涼とした山顔をその微光のうちに柔くつゝんで居るのを見たときに、私は名高い話を想ひだした……

Paraü Hina Tefatou（ヒナはテファトウに話した）といふ一つの古い〳〵物語を、それを小女達が夕によろこんで語り、その舞臺として小女達は、私が居るその場所を正しく指し示すだらう。

私はそれを見るやうに思つた………

神人の立派な頭、自然が彼の力に就いて恐ろしい自覺を與へたところの勇者の立派な首、すべての家の入口にあるやうな雄々しい巨人の顔色を。それに神様の髭に輕くふれ、かう

話して居る内氣な優しい女を………

——人間が死んだときに、も一度彼を蘇生せて下さい……神樣の強い、然し凄くはない唇が答へる爲めに開く……

いや、私は彼を蘇生せないだらう。人間は死ぬだらう。植物は、それに養はれて居る人間が死ぬやうに死ぬだらう。地球は降るだらう、二度と上らない爲めに地球は降るだらう。

ヒナは答へた……

——お氣に召しますやうに。私は然し月を又も登らせませう。

ヒナに屬するものは、生きることをつゞける。テファトゥに屬するものは降る。そして人間は死なゝければならない。

暫くこつちといふもの、私は消氣返へつて居た。そんな有様で自分の仕事は行きなやみの態だつた。實際私には自分を助けてくれる様々の大事な救治劑がなかつたのだ。藝術上の任務、それは嘗ては自分を有頂天にしたものであつたのに、今はそれに無氣力に立ち向つて居るのだといふことが自分の機嫌を損じたのでもあるが、然し先づ第一には私には歡樂が缺けて居たのだ。

數ヶ月こつち私はティティと別れて居るのだ。それでそれから
こつちといふもの、もう私は同じ事柄や同じ問題にあれ、あれが氣
隨氣儘に小供らしく、能く口を動かしてたお喋舌をきかない
のだ。それに私は何時も同じ物語をして答へて居たのだが。
そしてこの靜寂は私の爲めにはならなかつた。私は先へ行
かう、別にきまつた目當とては定めなかつたのだが、島巡り
をしやうと決心をした。
私がその準備――旅に入用なもの丶僅かばかりの輕い包――
をなし、自分の勉強を整理して居る間といふもの、自分の近所
の者で友達だつたアナニ Anani は不安らしく自分を見守つて
居た。永い間のためらひ、爲始めてはまた中止したといふ態

度、その態度のはつきりとしてくもりのない處が自分を大變よろこばせ、又同時に心を惹いたのだが、そんな態度の後で、彼は到當決心をして、私が旅立ちの準備をして居たのか、どうかといふことを尋ねた。

――いゝや、唯ほんの四五日の旅がしたいんだ、と私は答へた。

私はまた來る。

彼は私を信じない、で泣きだした。

彼の妻は妻で彼と一緒になつて、彼等が自分を愛して居るといふことをのみこませやうと、彼等の間に生活すのには私は少しのお金もいらないのだといふことや、お前さんが又好

いとお思ひのなら、永遠に何時もあそこに休むことが出來るのだ――彼女は彼等の小舍の側近くの小さい木で飾られた墓場を指した――といふことをいふた。

そして突然私に――そこに――眠れといふことを願つた。それなら少なくとも私を永遠に誰も邪魔するものはないだらう…………

――あなた方歐羅巴人は可笑しい。あなた方はいらつしやる、あなた方は此處に居るとお約束をなさる、そしてあなた方を皆が好きになると、あなた方はまた行つておしまいになる。かうアナニの妻は附け足した。

あなた方はまた歸つて來るためにとおつしやる。然しあな

た方はもう決して歸つていらつしやらない。――でもとに角こん度はまた歸つて來る心算だといふことを誓ひませう。

後になつては（私は能う嘘を吐かうとはしなかつたのだ）、後になつてはどうするかはまだ私は知らないのだが……到當彼等は私を去らしてくれた。

『＊』

私は海岸に沿ふて行く路から遠ざかつて、深い草叢のなか

を通ずる狹い徑を辿つた。その徑は數時間の後には小さい谷間の村に達した程遠く自分を山の中に導いた。そこの土人は古いマオリーの風習に從つて生活して居る。

彼等は靜に幸福である。彼等は幻を描き、彼等は愛し、眠り、歌う——彼等は祈る。そしてキリスト教はまだ此處まては這入りこんでなかつたやうに見える。はつきりと私は、事實にはとうの昔に消えてしまつたとはいひ、彼等の神々の像を目前に見る、ことにヒナの像を、月の女神を祀る祠を見る。唯一つの木から出來てる神樣の像は肩から肩までが十呎もあり、丈の高さが四十呎もある。その頭には帽子の形をした赤い色の大きい石を戴いて居る。その像の周りでマタムアMata-

muaの古い儀式によつて踊がされる、そしてヴィヴォーがその時々の色合によつて、よろこばしげに、晴れやかに、又は陰氣に、そして又悲しげにその音を奏する……

私は自分の道をなほ進めた。

タラヴァオ Taravao――島の反對の側の一番の端で、マタイエアから一番遠く隔つた草叢――で憲兵が私に馬を貸してくれた。それから私は今まで歐羅巴人から餘り尋ねられなかつた海岸に沿ふて馬を走らした。

名高いイティア Itia の手前にある小さい村のファオネ Faone で土人が私に呼びかけた。

――もしもし人間を作る人！（彼は私が畫家であることを知

つて居る。）Haëré mai ta maha（いらしつて、私達と一緒にめしあがれ。これが客を饗應すタヒティのきまりなのだ。）

私は自分にいやとはいはせなかつた、人を招く笑が氣持好く、心からなのだもの。

私は馬からおりた。その主人は馬の手綱のところをとつて、それを物々しくなく、巧に木に結へた。

それから私達は連れだつて小舍のなかに這入つた。そこには男も女も話したり、煙草をのんだりして地面に坐つて居る。その周りには小供等がはねたり、騷いだりして居る。

——貴方は何處へいらつしやるの？と奇麗な四十ばかりのマオリーの女が私に尋ねた。

――イティアへ行かうと思つて。

――何をなさりに？

どういふ考だつたのか、恐らくは又自分にも今だに隱されて居た、眞當の旅行の目的を何と名づけやうか、私は知らないのだ。

――其處で女を探さうと思つて、と私は答へた。

――ファオネには澤山そして奇麗なのが居る。貴方はその一人をほしくない？

――あ？

――まあ仕合せなこと！　あれがいゝ貴方のお氣に召すのなら、あれを貴方にあげませう。といふのはね、私の娘なの。

――若い？

――え。

――奇麗？

――え。

――丈夫？

――え。

――あゝ好いよ、つれておいで。

その女は直ぐに出て行つた。

四半時間ばかりたつて、食事――野生のまゝのバナナと蟹――が運ばれたときに、先きの女が若い小女を連れて又這入つて來た。小女は手に小さい花束を持つて居た。

透き通るやうな薔薇色のモスリンの着物をすかしてその肩や、腕の金色の皮膚が見える。二つの蕾がはりきつてその胸に高くなつて居た。驚くべく釣合のとれた、すらつとした、大きい、丈夫な小供であつた。然しその奇麗な顔には、島の外の場處では何處でゞも會うやうな、例の型といふものが私には見出せなかつた。髪も亦普通見慣れないもしや〳〵して、輕く波をうつて居る。日光の中にすべてこれ等がクロームの眞當のオルギーを呈する。

この小女はトンガスの生れだといふことである。

私は挨拶をした。小女は笑つて私の側に坐つた。

――私が恐くない？と尋ねた。

——Aïta（いゝえ）

——何時までも私の處に居られる？

——Eha（え）

——病氣ぢやない？

——Aïta

それだけである。

小女が平氣で私の前の地面にバナナの葉に食物をのせて私のために配つてくれてる間といふもの、私の心臟は波うつた。私は大變うまく喰べた。然し私は氣が遠くなり、ひどく昂奮した。この十三ばかり（歐羅巴にすれば十八から二十まで）の小供が私の心を惹き、動かし、恐がらした。この心のうち

に何が去來するのだらう。そして私、この小女に較べてはこんなに年を老つた私はこんなに急に決せられた申込に返事をするのを暫く躊躇した。然しその場合すべての都合は私の側に好かつたのだが。

恐らく――かう私は考へた――小女は母の命令に從がつたのだらう。恐らく自分でやりだした行爲であるとすれば……

私が若い小女の顏附のうちに、その態度仕草のうちに、この人種の特有な眞當の獨立と自負の表示を認めたときに私は安心した。私がなほすゝんで穿鑿してのち明にこの小女に晴晴した表情をたしかめたとき、私の信任は完全で、動かないものとなつた。表情といふものは若い者にあつては何時も貴

い、可愛らしい所作をひきおこすものだ——唯この小女の奇麗な、優しい、あだつぽい口もとの人を蔑すんだやうな素振りだけは私にはこんな證據になつた。それはこの事件の危な氣といふことは唯私にだけあるんで、小女にはない……私がこの小舍の閾を跨いだときに妙に自分の胸を抑へつける氣懸りに全く不安に堪えないやうであつたといふことを私は拒まない。

出發の時間が來た。私は馬にのつた。

小女は母と一人の男と二人の若い女——いふところによると叔母——とに連れられて、私につゝいた。

私達はタラヴァオに向つて歸つた。其處はファオネから二里餘

りはなれて居る。

——Parahi téié（こゝでとまつて）

私は馬からおりた。私達六人は大きい、奇麗に行届いた、なか／＼有福な、美事な蔭がひかれた小舍に入つた。

まだ若い、大變愛らしい夫婦がそこに住んで居た。私の花嫁はその側に坐はつて、私を紹介した。

——これは私の母です、かういふた。

それから物はいはず杯が奇麗な水でみたされた。それを私達は順々に古い信心深い風習のまゝにお祝儀にのんだ。

その次には私の花嫁からその母として引合された、情に激した眼差しと、涙にしめつた睫毛とを有つた女が私にいふた。

——貴方は好い方？

私は自分の良心を吟味して當惑せずには答へられなかつた。

——そうありたいものです。

——私の娘を仕合せにし下さるでせうね。

——え。

——八日目にあの子は歸らなければなりません。若しあの子が仕合せでないのなら、あの子は貴方をすてるでせう。

私は身振りで承諾を與へた。皆が默つて居る。誰も能うこれを破るものはなかつた。

到當私達は外に出た。私は又馬に乘つた。同じやうにずうとお供につれられて更に出發した。

途中で私達は私の家族を知つて居る澤山の人に會つた。彼等はとうにことの次第を知つて、小女に挨拶するやうにいふた。

——今日はもう眞當にフランスの方のワヒナになつたのか。おめでたう。

一つのことが私を不安にした。どうしてテフラ Tehura（私の妻はかう呼ぶのだ）は二人の母のものなのだらう。私はあれを自分にくれた第一の母に尋ねた。

——何故あなたは嘘をいふたのか。

テフラの母は答へた。

——私は嘘は申しません、あれもこの子の母です。あれは

この子の乳母なのです。

、

タラヴァオで私は憲兵に馬を返へした。そこに痛ましいことがやつて來た。憲兵のかみさんのフランスの女が、輕蔑はしないが無切棒に私にかういふた。

——どうしたつていふのでせう！　貴方はまあこんな人なんかつれてゐらつして？

そして惡意を有つた彼女の眼が若い小女を穴のあくやうに

見つめた。小女はこの侮辱的な穿鑿に全く平氣で向つて居た。私はこの刹那二人の女の與へてくれた象徵的の芝居を觀察した。こゝ、小女に處女の盛時と信仰と自然とがあり、かしこ、フランスの女に乾燥さ束縛と作り物とがある。二つの敵對せる種族は相向つてたつた。そして私は自分の種族のことを恥ぢた。私はあのフランスの女をこんなにも小さく、無知と見るのが苦しかつた。それで私は、自分が旣に〳〵愛して居た他の種族の光輝、この生き〳〵した金色によろこび、熱しやうと急に振り向ひた。

タラヴァオで家族は樣々とり合せた酒や果物、武器や織物、男や女や家畜、すべてのものが便せられる支那人の處で私達

と別れた。

私の妻と私とは、マタイエアの私の小舎まではその先き六里餘りある、そこを馬車を利用した。

私の妻は大變お謀舌でもなく、晴やかなことも、陰鬱なところも同じ位であつた。然しその中で人を蔑すむところが勝つて居る。

私達はお互に探ぐりを入れることをやめなかつた。然し彼

女は測り知るべからずであつた。やがて私は直ぐにこの戰に於ける被征服者であつた。

鋭い觀察者とならんが爲めに、自分を看守し、支配しやうといふ善き計畫も私には餘り役にたゝなかつた。直ぐ樣私の力は行きつまつた――そして私はテフラにとつては暫時にして謎のない明ら樣な書物となつた。

そうかうして私は幾部分自分の勘定と自分自身の人柄に深い缺陷を認めて來た。それはオーストラリア人の心とラテン人種、ことにフランス人の心との隔りである。マオリー人の心は直下に自分を明ら樣にするやうなことはない。その心を捉へるには大きい忍耐と研究とを要する。そして底の底から

解かつたと思ふときですら、彼等の心は理解の中から全然前には見えなかつた裂目を引き出す、發端に於ては何といつたつてマオリー人の心は謎である、いやむしろ謎の限りない連續である。その心を理解したと思ふ瞬間に、その心は快活といふ外套のなかに隔たり、達することが出來ず、近寄ることが出來ないのだ。それからこん度はその心は恐らく人が僅かばかりの確實といふことを認めるやうになると直ぐに、又も滑り去るために自分から近寄つて來る。そしてこんな仕打ちによつて困らされ、その奧の〱眞底を求めてる間といふものは、その心は打ちこはすことの出來ない嬉しそうな確信と心配のない心易すさを有つて居る。それは恐らく見掛よりは

純正なものではないのだが。
私の方では、私の生活を味はうのを妨げた無益な穿鑿を直ぐにやめた。私は全く信頼して時といふものに表白といふことを待つて居た。初めにはそれは私には悲しかつたのだ。
その週間はこんなことですぎた。そして私は嘗て以前に感じたことのない「小供らしい」感情を抱いた。
私はテフラを戀してたのだ。そのことを彼女にいふた。然しそれは彼女を笑はせた。彼女は私の戀を知つたのだ、あ、そうだ！
彼女も私を愛するやうに見えた。然し彼女はそのことについては何ともいはなかつた——然し時折り夜にテフラの皮膚

の金色が光つた……

八日目に……私には今初めて私達の家に一緒に連れだつて來たやうに思はれた——テフラはファオネの母を訪ねたいと懇願した。それは約束したことなのだ。

私は不安になつて來た。私は彼女のハンケチにいくらかのお金をつゝんでやつた。それで彼女は旅の費用さ父への糖酒の代を拂ふことが出來るのだ。そして彼女を馬車で送つた。

私は永久に別れる感じがした。

その後の毎日は不安であつた。

寂寥は私を小舍から追ひだし、追憶は私を再びそこに呼び戻した。どんな勉強も私の考へをすつかり縛つてしまうこさ

は出來なかつた…‥

次の週間がすぎた。そしてテフラは歸つて來た。それから全く幸福な生活が始まつた。幸福と仕事とが太陽と同時に始まり、太陽の如く輝いた。テフラの顔の金色は私達の小舍の內部、周圍の自然を喜悅と快活の光を以て照らした。彼女は最早私に探りを入れはしない。私も彼女にしない。彼女は最早私に自分の戀を隱せなくなつた。そして私は最早自分の戀を彼女に語らなくなつた。私達二人は全く純朴な生活をした。

朝には近くの小河に體を淨めに行くといふやうなことをどんなに嬉しくやつたらう――丁度それが天國で最初の男と最

初の女さがしたことのやうに全く私には考へられた。

タヒティの天國、navé navé fénua――貴き國！

そしてこの天國のエヴァは益愛らしく、益懷かしくなつていつた。私は彼女の香 noa, noa！からすつかり浸されてしまつた。彼女は一番好い時に私の生活に現はれて來たのだ。早かつたら私は恐らく理解しなかつたらうし、後だつたら餘りおそすぎたらう。今は私が彼女を愛するやうに、彼女を理解して居る。そして私は彼女を通じて、今まで自分には近寄れなかつた神秘のなかへ入りこんで行つた。

自分の精神だけはまだこの發見といふことを消化してなかつた。私は自分の記憶のなかにまだ彼女を刻みこんではなかつた。

つた。テフラの私に物語つたものは皆、私は唯感情だけで理解してた。

私は自分の感じや印象のうちに彼女の言葉を他日また發見するだらう。ある外の方法でされるよりも、もつと確實に彼女の生活上の日々の仲立ちに依つて私がその種族を全く理解するやうに彼女は私を導いた。

そして私は最早日も時も、善も惡も、そんな意識は有たない。その幸福は時として、幸福といふ概念なんかは全くなくなつてしまうほど奇しきものであつた。すべては美であるが故に、すべては善であると、私は唯かういふことを知るばかりである。

そしてテフラは決して私の邪魔をしない、私が働くときにも、又夢を描くときにも、本能的に彼女はそのときはだまる。彼女は私をこまらせることなしに話の出來るときを能く知つて居る。

私達はタヒティのこと、歐羅巴のこと、又は神樣、神々樣のことを語り合つた。私は彼女を敎育し、彼女は私を敎へた。

私は一日がゝりでパペエテに行かなければならなかつた。

その夕方には私は歸る、としつかり約束をした。然し私の乘つた馬車は道の途中で駄目になつた。私はその先を徒步で行かなければならなかつた。それで家に着く前に、朝の一時になつた。

私が戸を開けたときに、家のなかの眞暗なのに胸を痛めて、見た。このことはそのことだけでは大した氣を引くほどのことではなかつたのだ。何故といふに私達は少しの間ほんの僅かの燈火しか有たなかつたのだ。そしてその貯蓄を新らしくするといふのが、自分が留守にした一つの理由でもあつたのだから。然し私は恐怖と嫉妬との突差の感情にふるへた。その感情を私は、鳥は確にとんで行つた、といふしらせ、だと思

つた…………

急いで私はマッチをつけて見た――テフラは寢床の上に動かずに、裸で、偏たくのびて居た。その眼は恐怖で尋常外れて大きく開いてた。彼女は私を見守つた。そして私を見分けられないやうだつた。私自身は數秒間不思議な不安のなかに立つた。テフラの驚愕が貫ぬくやうに動いた。私には、そのじつとした、見つめた眼が燐光のながれるやうであつた。唯の一度も嘗て私はこんな美しい、こんなに心を動かされた美しさを見たことがなかつた。そしてそのさきこの彼女にとつては確に疑がはしい幻影に動かされてる薄暗がりのなかで、私は動くのを心配した。動くことが彼女をこわがらせ、小供

の發作を高めかねなかつたからだ。一體私は、この瞬間の私は彼女にとつて何であつたかといふことを知つたんだらうか、彼女は私のおどろいた顏を惡鬼か、又は幽靈か、彼女の傳說によれば眠られない夜に現はれるといふテッパバユスの一つと思つたのだらうか。彼女自身が本來何だらうかを私は知つたのだらうか。彼女の迷信の肉體的並に道德的の力で彼女がとらへられた驚愕の强さは、彼女を私が今迄知つてたものとは全くちがつた、私にとつて別な〳〵物精にしたのだ！

到當彼女は自分に返へつて、私に呼びかけた。そこで私は彼女を叱り、なだめ、鎭めるやうに自分の勇氣を鼓舞した。

彼女は不機嫌に私のいふことをきいてたが、歔欷からふる

へる聲をしていふた

――もう私を燈光のないところに一人でおいとかないやうに……

然し嫉妬がおこつて來たときには、不安は容易に鎭まらなかつた。

――貴方は町で何をしていらつしたの。貴方は女を、市場で踊つたり、のんだりする、そんな女を、役人や水夫や誰にでも身を任せるやうな女を訪ねたんだ……

私は喧嘩にはさせなかつた。その夜はさはやかな――さはやかで、熱い、熱帶の夜だつた。

テフラは忽ちひどく愛らしくなり、又理性的になつた、又

忽ち常規を逸し、ひどく激越して來る。二つの相對向した性質——他の多くの無限にことなつたものを數のなかへ入れずに——が一つになる。それがお互の虚僞を責め、非常な速度で踵を接してお互に續いてゆいた。彼女は變るといふことはなかつたのだ。そうでなくつて二重、三重、百重なのだつた。
老ひたる種族の小供であつた。
ある日行商、永遠の猶太人がやつて來た——彼は島を大陸のやうに不安にさす——鍍金をした銅の化粧品の入つた箱を有つて來た。
彼はその品物を列べてた、皆は彼の周りをとり捲いた。
一組の耳輪が手から手に渡つた。女達の眼はかゞやき、誰

も誰もそれをほしがつた。

テフラは肩をうごかし、私の方を見た。彼女の眼は大變はつきり話をして居る。私は知らないやうにして居た。

彼女は私を隅の方へ引張はる。

——私あれがほしい。

——こんなものはフランスでは何の値打もないものだといふこと、それは銅だといふことを私は彼女に説明した。

——私あれがほしい。

——だめ。こんな馬鹿なものに二十フランク拂ふんだつて。馬鹿なことだ。いけない。

——私あれがほしい。

そして激越して來て舌を動かし、眼に涙を一杯にして私に迫つた。

――どうしてまあ貴方はかういふ飾を他人の耳に見るのを恥としないんだらう？あそこに居る人はもうそのワヒナに耳輪を贈るために馬を賣らうといふて居る！

私はこんな馬鹿なことをゆるしてはならない。それで二度彼女をたしなめてやつた。

テフラは一言もいはずに、じつと私を見つめて、泣いた。

私は行つて、又戻つて來、到當猶太人に二十フランクやつた――そしたら太陽は又かゞやいた。

二日あとが日曜日だつた。テフラは大變なお化粧をした。

髮は石鹸で洗つて、それから日の光にかはかし、それからおしまいに匂(にほひ)のする油をすきこんだ。一番奇麗な着物をきて、私のハンケチを手に有ち、耳の後には花をつけ、それから——跣足でお寺に行く。

——それから例の耳輪は？と私は尋ねた。

テフラは蔑すむやうに口を歪めた。

——眞當に銅なの！

そして大聲に笑つて小舍の閾をまたいで、俄に眞面目になつて出て行く。

何時もの外の日と同じやうに相並んで寢たり、夢を見たりして、午の休をすごした。恐らくテフラはその夢に外の耳輪

のかゞやくのを見たらう。
私は知つてるすべてを忘れ、何時も能くねむれる……

*

一日上天氣に――タヒティでは例外のない――私達は朝出發して友達を訪ねやうと決心をした。その友達の家といふのは私達の處からは二里半ばかり隔たつて居た。
私達は六時に出發したので、涼しいうちに道を急いだ、そしてもう八時には着いた。

私達は待ち設けられてなかつた。その喜びは大變だつた。そして挨拶がすむと彼等は私達の御馳走の支度に豚を探しに出かけて行つた。豚は屠られた、また豚の外に二羽の鷄が足された。朝摑へられた美事な黑蝸牛とバナナが幾らかとそれに外の果物とで立派な御馳走が出來た。私は晝飯までの時間でマラの洞穴 Grotten von Mara を探見しやうといふ相談を持ちかけた。その洞穴といふのはまだ一度も探見する機會がなく、私は度々遠くから眺めてたのだ。

三人の若い娘、男の兒、それにテフラと私との元氣な僅かの連中は直きに目差す處に着いた。

道端からは、この大概はすつかり Guava の木で蔽はれた洞

穴は單純に岩の出鼻が、それともいくらか深い裂目位にしか思はれない。然し枝を曲げ戻して、下の方へもう三尺も這入らうものなら、太陽はもう見えなくなり、ある一種の穴のなかに居る。その底は見たところ三百尺も隔つてる濃紅色の天井のある舞臺を想はせるやうなものだ。壁のあちこちには大きい蛇が内部の池の上水を呑むのにぬるぬるとぬたくりついてるやうに思はれる。然しそれは岩の裂目を通つて道を開いてる襞なのだ。

――水を浴びやうよ、ね?。

水があんまり冷めたすぎるといふのが返事だつた。そしてお構なく永い話が笑聲で途切られてはまた續いた。それが私

に好奇心を持たせるやうにする。

私は敗けはしない、そして到當娘達は輕い着物を脱がうと決心した。バレオを卷きつけて、私達は直きにもう水の中に居た。

——Toë, toë!（おゝ冷めたい）と皆が一緒に叫んだ。

水がぱしあ〱と音をたてる、そして皆の叫聲が數千の木精に射返される。それが toë, toë を繰返へす。

——私と一緒に來ないか、と私はテフラにいふて底の方を指した。

——まあ、あなたはどうかなすつたんぢやない？　まあ、あんな底の方、遠いわ！　それともあなたは鰻？　そんな底へ誰が

行けるものですか。

そして彼女は巧く泳げるのが得意な人のやうに活潑に易々と岸にとびあがつた。然し私だつても泳ぎは巧者だ、一人でそんなに遠くへ行くのは氣持好くはなかつたけれども、私は奥の方へ進んで行つた。

何といふ不思議な空中反映の現象に依つてなのだらう、私は底へ達しやうと骨を折れば折る程段々奥底は遠くなつて行く。私は段々先へ〱迫つて行つた。そして四方八方からは大きい蛇が私を輕蔑して見て居る。一瞬間私は大きい龜が泳いでるのを見るやうに思つた。その頭は水から突き出して居る。そして猜疑深く私の方を見て居る二つの凝とした輝いた

眼を見分けた。――馬鹿な！と私は考へた。海龜が淡水のなかに居るものか。それはそうとしても（私も眞當にマオリー人になつたのだらうか）私には疑惑だつた。からだの震ひが仲仲やまない。一體私の前の幅の廣い靜かな波は何の波なんだ。鰻だつて。

――あゝこの恐怖から來る自由のとれないものにする感じを斷つてしまはなければならない。

私は底に達するために眞直にからだを下した。然し達することが出來ずにまた浮かばなければならなかつた。岸からテフラが私を呼んでる。

――歸つていらつしやい！。

私がからだを轉ずると、彼女が大變遠く、實に小さく見える。

何故間隔が此處でも無際限に行くのだらう。テフラは明い輪の中の黑い點にしかすぎなかつた。

私は頑張つた、そしてなほ半時間泳いだ。底は何時も同じ距離にあるやうに見える。

小さい丘の上の靜止點と、それからまた口を開いてる穴と――それは何處へ行くのだらう。秘密、それを私は穿鑿することをやめる。

私は到當眞當に恐怖を感じたといふことを私は白狀する。

私は目的を達するに一時間たつぷりかゝつた。

テフラだけ私を待つてた。仲間は平氣の平左で行つてしまつた。

テフラは祈をあげ、私達は洞穴を去つた。

私はなほ暫く震へてた——冷たさで。然し野原のなかでは私はもう直ぐに、ことにテフラが少しも蔑すむところの見えない微笑をたゞへて問ひかけたときにはもうすつかり元氣になつた。

——恐くはなかつて?。

私は怒つて答へた。

——私達フランス人は恐いなんといふことを知らない。

テフラは同情も表せず、驚きもしない。然し私は彼女が探

ぐるやうに眦から流し眼に見てるのに、彼女の頭髪のために色のある Tiare を摘まうとして私が二三歩先きに出たとき、氣がついた。

道は美しかつた、海は立派だつた。私の前にはモレアの堂堂とした、雄大な山が聳えたつて居る。

まあどんなに幸福なんだらう。そしてどんなに甘しがつて二時間の水泳の後で家に待つてた上手に料理された豚を喰べただらう。

＊！

マタイエア Mataïéa に大變な婚禮——宣敎師等が改宗したタヒティの人と記したやうに合法的、宗敎的に正當な婚禮——があつた。

私はそれに招ねかれた、テフラは私を連れて行つた。

宴會がタヒティでは——何處でもそうだと思ふが——重なるお祝になるのだ。タヒティでは少なくともかういふお祝には大變贅澤な料理が出る。熱い石の上で炙られた豚とか、魚、バナナ、グアヴヽタロ Taro 等の信じ得られないやうな混ぜ物とか、といふやうに。

威儀堂々としたお客が坐はる食卓は一時間に合せの屋根の

下にある。その屋根は景氣好く花や葉を以て飾られてあつた。新婚夫婦の親類と友達とは席に着いた。

若い娘――土地の女教師で、半白色種の女――は系統の正しいマオリー人、プナアウイアPunaauiaの頭領の息子を夫にした。彼女はパペエテの「宗教學校」 "formme Schule" で教育された。彼女に興味を感じてた新教の僧正は多くの人には早すぎると思はれたこの婚姻を自から媒介をした。――宣教師の欲する處は神樣の意志である、といふことだ…………

一時間たつぷり食つた、そして――多くは飲んだのだ。澤山の演說が始まつた。それが順序に從ひ、方式を以てされた。正しく滑稽な雄辯競爭會である。

さて重大な問題がやつて來る。この二つの家族の何方が新婚の夫婦に新しい名を與へるのか。この非常に古い時代から傳はつて來た國民的習慣といふものは重んぜられ、非常に渴仰せられ、多くのものを屈服さした大特權を意味してるのである。この點に關する爭が血腥い戰爭に變じたことも稀ではなかつた。

今度はそんなことにはなりやしない。萬事が愉快に、平和に運ぶ。無論食卓の連中は非常に醉つた。私の可愛相なワヒナさへ、彼女は私の監督の許に居ることは出來なかつたのだが、あたりの例につれて恐ろしく醉つてしまつた。そして連れて歸るにはずい分骨が折れた。

食卓の中央に賞賛に價するだけの威嚴を持してプナアウィアの頭領の妻が坐つた。そのオレンヂ色の天鵞絨のけば〳〵しい奇怪な着物は丁度歳の市の女といつた外見を與へた。然しこの人種の打ち破しがたい愛嬌、たとへば階級の自覺といふやうなことが彼女のぴか〳〵な着物に筆舌に餘る偉大さを附けた。この實に純粹な型の威儀堂々とした女性が座に在るといふことが、このお祝に他のすべてにたち優つて強い刺戟を與へた。そしてその効果といふものは決して眼に見えなくはなかつた。

妻と並んで百歳の媼が坐つた。その老齡にもかゝはらず完全に保存されてる二列の食人齒には驚かされる。彼女は自分

の周りの出來事には殆ど頓着せず、全く木乃伊のやうに動かずに凝として居た。然しその類の上の文字、ラテン文字を想はするやうな形の不定な黑い記號は私の眼には彼女のために話をし、そして彼女の歷史を物語る。その文身は野蠻人のとは同じな物が何もない。それは確に歐羅巴人の手に依るものだ。

私は自問した。

嘗て私はかういふことをきいたことがある。宣敎師等が性慾に驅られたときには、彼等は「ある女」を醜行の極印を押して「地獄の印章」であると指示した——女はそれを愧ぢた、然し犯かされたところの罪の故にではなく、かういふ「記號」の馬鹿らしさと面目なさとからだ。

その時私は歐羅巴人に對するマオリー人の不信任、オーストラリア人の心の寛大な、そして愛相の好い性質のなかに和げられては見えるのだが、今日でもなほ存してるところの不信任のわけを好く理解した。

何年間かゝ僧侶から指示された媼と、僧侶から結婚させられた娘との間にはある。記號は消えずに殘り、そしてこの人種の自から投じたところの衰亡や又この人種が彼女に强制したその墮落といふことを證明して居る。

五ケ月後に若い女は發育充分の小供を産んだ。

驚いて兩親は離婚を請求した。若い男は反對した。

――私達はお互に愛してるのに何をなさる、と彼はいふた。

他人の子供を引取ることはこゝでは習慣ぢやないでせうか。
私は小供を引取ります。

何故僧正は結婚を急がすのにあんなに骨折つたのだらうか。いろ〳〵なことがいはれた。毒舌は主張した、こんなことを……タヒティにすらも毒舌はある。

夕に寢床の上で私達はお互に眞面目に永いお喋舌をする。その胸のうちには祖先の精神がいまだなほ眠つて夢を見て居るテフラを理解することの出來る今、私はこの小供の心を通して自分を見、自分を考へ、そしてこの心のうちに實はとうに死んでしまつたのではあるが、なほ漠とした記憶のうちに存して居る遠い過去の痕跡を發見しやうと努める。

私は問をだす、そしてそれは皆答へられた。

歐羅巴人の征服から困亂され、その文明から强く影響された男達は恐らく古い神様を忘れてしまつたのだ。神様は女達の記憶のうちに隱家を有つてた。私の影響で古い國民的の神様がテフラの記憶のうちに目を覺まして、新敎の宣敎師等がそのなかに封じこんでしまつたと信じてた人工的の被覆を除き去るならば、それは私には面白い芝居だ。元來カテヘートの仕事といふものは實に皮相的なものだ。彼等のはたらきの結果は、ことに女性に於て、唯彼等の希待にも報ゆるところはなかつた。彼等の敎は、僅か觸れたゞけで直ぐ樣碎けて消えてしまう脆い假漆のやうなものだ。

テフラは規律正しく神様のお勤をなし、國敎の條文を遵奉

する。然し彼女はマオリーのオリンピアの神樣の名を皆暗誦して居る。このことは決して小さいことではない。彼女は神樣の物語を知つてゝ、神樣がどうして世界をお作りになり、どんなにそれを支配し、どんなに尊敬されたいのか、といふやうなことを敎へた。キリスト敎道德の嚴格なる敎は彼女には餘所のものである、またそれ故に苦しめもしない。たとへばある Tané の妾――そう呼ばれるやうに――であるといふことを何も懺悔しやうとは思はない。

彼女がキリストとタアロア Taaroa とを自分の信仰のなかでどんなに列べておくのかは、好くは私は知らない。彼女はすべて兩者を崇めてることを私は信ずる。

段々と彼女は私にタヒティの宗敎に關する講習を全部してしまつた。それに對して私は歐羅巴人の智識の土臺に立つて二三の自然現象を説明しやうと試みた。

彼女は大變星に興味を有つてた。彼女は私に曉の明星、宵の明星、それから外の星のフランスの呼び方を尋ぬる。地球が太陽の周りを廻轉する……それを納得することは彼女には困難だ。

彼女は私に土語で星を名指す、そして彼女が話してる間は、私にはそれ自身が神樣である星の光彩の中にマオリーの空氣、火炎、島嶼、海洋の支配者の聖像が目前にはつきり見える。

タヒティの土人は自分達の物語のうちに頭を向けてる間は何

時も可成り突きこんだ天文學の智識を有つてた。

アレオイス Areoïs――この島を支配して居る宗教的で同時に政治的の秘密結社の仲間――の定期のお祭は星の位置に依つてきめられる。月光の性質でさへもマオリー人には決して解らないことではなかつたやうに思はれる。彼等は、月は地球に大變に似た球で、地球のやうに生産物に富んで居る、と考へた。

月と地球の距離は彼等は彼等一流に測つて居る。――白い鳩ラがオ Ora の木の種子を月から地球に有つて來た。鳩は衞星に達するに二月かゝつた。そして鳩がまた二月後に地球に降りたときには、鳩は翼がなかつた。――この島はマオリー人に

知られてる島中で一番速いものだ。
かういふのがタヒティの星の名前なのだ。私はテフラの講義をポリネシア群島で發見された古記錄の斷片の助を借りて完成した。
天文學から列べられた系統の最初の解說の方が、想像の偶然な遊戲よりも先きに存してたといふことをそのなかに發見しやうとは思はれない。

ロウア Roüa――その種族は大きい――はその妻、悲痛の地球とねた。
彼女は地球の王樣、太陽、その次に黄昏、それから

夜を産んだ。

「そこでロウアはこの妻を逐ひだした。

ロウア――その種族は大きい――" Grande Réunion "と呼ばれた女とゐた。

彼女は天の女王、星、それから星タヒティ、宵の明星を産んだ。

唯一の王様、金色の天の王様はその妻ファノウイFanouïとゐた。

彼女から星タウロウア Taüroüa (ヴェヌス)と、曉の明星と、晝と夜と他の星、月と太陽に命令し、案內者として船頭に仕ひてる王様タウロウアが生まれた。

タウロウアは左北方に航した、そこでその妻とねて、赤い星を、宵に二つの顔の下に輝くかの星を産んだ。赤い星は東方にのがれて、自分のピローヂ、輝く日のピローヂを修繕した。そして天に航した。日の出に際して其處から漕ぎだした。

レホウア Rehoüa は廣大な空間に出現した。彼はその妻、オウラ・タネイパ Oüra Tanéïpa とねる。彼女はプレヤーデンと相對する雙生兒の王様を産んだ。

この雙生兒の王様は確にカストル、ボルックスと同じだ。

ポリネシア創世記の最初の草案は變化をした、その變化は恐らく進化にすぎないのだ。

タアロア Taaroa は外界（若しくは海の）の女神と自分を呼ぶ女とねた。

彼女は白い雲、黒い雲、雨を產んだ。

タアロアは內部（若しくは陸の）の女神と自分を呼ぶ女とねた。

彼等から最初の萠芽が生まれる。地球の表面に生ずるすべてのものが生まれる。

山の上の霧が生まれる。

自分を強さ呼ぶものが生まれる。

自分を美さ呼ぶもの、若しくは氣持好く着飾つたものが生れる。

マホウイ Mahoüi は自分のピローヂを動かす。

註――このマホツイは星を作るロツアさ同様にタアロアさ同一らしい。恐らく同じ神様のちがつた名なのだらう。

彼は地面の上に坐はる。彼の右側に頭髮を捩つた紐で麻繩に結ひられた釣針がひつかゝつた。そして彼が手にとつた釣針の着いた麻繩を彼は宇宙のどん底に、大きな魚(地球)を釣るために放り投げた。

鈎はしつかり咬みついてた。

軸が見えて來た、神樣はすでに地球の非常な重味を感じてる。

テファトウ Tefatou（地球の神で、地球自身）はなほ無際限の空間のなかを搖られながら、釣針にひつかゝつて、夜から高くあがる。

マホウイは空間のなかに搖れてゐ、そしてそれを彼の思ひのまゝに動かすことの出來る大きい魚を釣つた。

彼はそれを手にとる。

マホウイは晝と夜とが同じ長さであるやうに太陽の軌道をきめる。

私はテフラに神々様のことを話すやうにたのんだ。

――タアロアは空氣の女神、オヒナ Ohina とゐた。彼等から虹、日光、赤い雲、赤い雨が生れた。

タアロアは地底の女神、オヒナとゐた。彼等はテファトウ、精神を產んだ。それは地球を生かし、地下の騷擾に依つて自分を認めさせて居るのだ。

タアロアは地球の彼岸と呼ばれる女とゐた。彼等は神樣のテイリイ Téirii ロウアノウア Roïianoïia を產んだ。

その次にはロオ Roo, これは別に母親のからだから出

て來た。

そしてこの女がなほ憤怒と暴風と、狂風と、是等につゞく平和をも產んだ。

そしてこの精神の根源は、そこから使者が送られた場處であつた。

然しテフラはこの敍述は攻擊されるかも知れないと附けたしたが、これは正統な分類である。

神樣達はアテゥアス Atuas とオロマテゥアス Oromatuas とに分かれる。

高位のアテゥアスは皆タアロアの兒や孫だ。

彼等は天に住んでる――それに七つの天がある。タアロアとその妻フェイイ・フェイイ・マイテライ Féii Féii Maïtéraï の子といふのが、からうだ。オロ Oro（彼の父に次いで神様の中で第一人であり、二人の子テタイ・マティ Tetaï Mati とオウロウ・テフェタ Oüroü Téféta とを有つてる）、ラア Raa（七人の子の父）、タネ Tané（六人の子の父）ロオ Roo, ティエリ Tiéri, テファトウ Tefatou, ロウア・ノウア Roüa Noüa, トマ・ホラ Toma Hora, ロウア・オウティア Roüa Oütia, モエ Moé, トウパ Toüpa, パノウア Panoüa 等。

これ等の神様の各自は特別の記號を有つてた。

マホウイとテファトウとの仕事は私達はすでに知つてる・・・・タネは第七番目の天を口として有つ――そしてこのことは

神様の國、そこから光が地球を照し始める天の一番の外の端だといふことを意味するのだ。

リイ Rii は天と地とを分つ。

ロウイは大洋の水を湧きかへらせ、地球の堅い塊を破つて、無數の部分、今日の島に分けた。

その頭は雲に、その足は海底に達してるファノウラ Fanoüra とまた外の巨人ファトウホウイ Fatouhoüi とが一緒にエイヴァ Eiva ——未知の國——の方へ下つた。人間を呑む大きい豚と戰ひ、それを亡ぼす爲めに。

泥棒の神様、ヒロ Hiro は彼の指で岩に穴を掘つた。彼は人食ひ鬼が魔宮に虜にしておいた若い女を自由にしてやつた。彼

は唯一本の手で終日若い女の牢獄をかくしてた大樹木を伐り倒した、そして魔法はこわされた…………

下級のアテッアスは彼等の習慣を分たずに人間の生活や勞働の爲めに苦勞をした。

それはかうだ。アテッアスのマホ Maho（神樣の鮫）は船乘りの守護神であり、谿谷の男女の神樣、ペホ Pëho は百姓の守護神であり、ノ・テ・オウパス・オウパス No Te Oüpas Oüpas は歌唱ひ、道化役者、踊子の守護神であり、ラアオウ・パヴァ・マイス Raaoü Pava Maïs は醫者の守護神であり、ノ・アパス No Apas は供物を捧げるものを妖術や魔法から助ける神であり、オ・タノウ O Ttanoü は勞働者の守護神であり、タネ・イテ・ハアス Tané Ité Haas は大工、

建築家の守護神であり、ミニアスMiniasとパペアスPapeasは屋根屋の守護神であり、マタティニスMatatinisは網作りの守護神である。

オロマテッアスは氏神である。

眞當のオロマテッアスと守護神とがある。オロマテゥアスといふのは喧嘩好きを罰し、家庭のうちに平和を確立する。それはかうだ。ヴァルナ・タアタスVarna Taatasは家の死んだ男女の心靈であり、エリオリオスEriorios は早世した小供の心靈であり、ポウアラスPoüaras は生れるとき死に、そして蟋蟀の體に歸つて行つた小供の心靈である。

守護神といふのは人間から假定され、むしろ意識的に考へ

られた神様である。ある動物なり、物なりに、たとへばある樹木に勝手に理由はなく神様らしい意味を附け添へ、何か大事の場合にはそれに相談をするのだ。――これは恐らくマオリ一人が多分知つてたらしい印度人の輪廻説の痕跡の今に存するものだらう。

彼等の歴史的の歌は、神様がまた動物や植物の姿になることが見られる傳説に富んで居る。

アテッアスとオロマテゥアスとの次ぎに天上の階級の最後の列次にティイス Tiis が來る。

タアロアとヒナの子が大變澤山あつた。

神様の下に位し、人間には遠い魂魄として、彼等はマオリ

ーの傳說に依れば生物と無生物との間に介在し、生物の無法なる攻擊に對して無生物の要求と權利とを防禦する。

彼等の起原はかうだ。

タアロアがアニ Ani（憧憬）とゐた。そして彼等が產んだのが、暗と死との使者なる夜の憧憬、光と生との使者なる晝の憧憬、天國の使者なる神樣の憧憬、地極の使者なる人間の憧憬であつた。

次に產んだのが、動物と植物とを見張つてる內部のティイ、外界のあらゆるものを守る外界のティイ、砂地のティイ、海濱のティイ、瘠地のティイ、岩石のティイ、大陸のティイとであつた。

その後になほ生れたのが、夜の生活、晝の生活、來往、干

滿、愛好賞玩であつた。

ティイの像はマラエ Maraé（寺）の外側に貼られて、神聖な地面の内部を仕切つた。吾々は岩の上にも、海のほとりにもそれを見る。此の偶像は陸と海の間に境を劃し、二つの要素の間に調和を確立し、相互の侵略を防ぐ任務を有つて居る。旅人は今もなほイレ・デゥ・バクエ Ile-de-Paques の上にティイの像を見るのである。それは半人半獸の姿の大きい紀念碑であつて、石の取扱ひ方に固有の美的思想と非常な技倆とを示し、巧に色彩の配合を選擇した石碑が建築的に重なり〳〵積まれてある。

歐羅巴人の侵略と唯一神敎とが高文明の痕跡を拭ひ去つた。タヒティの人は今日碑をたてるときには驚く可き下等の趣味を

あらはす——丁度ポマーレの墓碑のやうに。彼等は本來の本能を失つてしまつた。それはたえず動植物界と接觸して多分に彼等の間に發達したものであつたのだ。吾々歐羅巴人との交通や歐羅巴人の學校で彼等は、初めて眞當のラテン西方人が用ゐた意味での「野蠻」になつた。彼等は藝術品のやうに美しくはなつてる、然し彼等は道德的に、そして又物質的にも貧弱になり（吾々はそうさした）。

マラエの跡はなほ存して居る。それは三つの開きで中斷された塀で圍まれた四邊形のものであつた。三方は四尺乃至六尺の石塀からなり、幅よりは稍低いピラミッドが四番目になる。全體が幅約百米突、長四十米突である。——ティイの像がこの單

純な建物を飾つて居た。

月はマオリーの哲學思想のうちで重要な地位を占める。月を崇めるために以前には大變なお祭が行はれたことはすでに云はれてある。ヒナは傳說の物語のなかではしばしばアレオイスと呼ばれる。けれどもその世界調和に對する協力は積極的よりはむしろ消極的の役を演じた。

このことは前に記したヒナとテファトウの話から明からである。

かやうな話は、若しオーストラリアの經文が發見さるゝならば、それを說明するために註釋者に立派な材料を供給するだらう。先づ第一に彼はその中に自然力崇拜――すべての原

始宗敎の共通的性質――に宗敎の敎理のあるのを見るだらう。すべてのマォリーの神様の複數は種々の要素の擬人化である。彼等の民族性よりも吾々歐羅巴人の哲學の優逸なることを證明しやうといふ希望に妨げられ、影響されない注意深い眼光はこれらの物語のうちに確に興味があり、又本質的な特徴を發見するだらう。私はそこから二つの特徴を引き出せる――然し私はそれを指示するだけで滿足するのだ。この假定の正當なることを確むるのは學者の仕事である。

先づ第一に明快に人生の唯一的なるものと、一般的なるものとの二つの根本思想を區別し、表はしてることである。一方、心靈、知能、タアロアは男性であり、他方同じ神様のい

はゞ材料、體軀は女性である、そしてこれはヒナである。人間のあらゆる愛情はヒナに、尊敬はタアロアに屬する。ヒナは月の名であるばかりでなく、空のヒナ、海のヒナ、陸のヒナである。然しこの二つの文字、即ち海と陸とは唯物質の下級の部分を指示するものである。太陽、天、光、及び其の領分、いはゞ物質のすべての高尙な部分——むしろその精神的要素といふべきはタアロアである。このことは靈魂と物質との定義がそのなかからまた認められる多くの諺から明かになる——若し吾々がこの定義に從ふならば、

宇宙はタアロアの皿にすぎない、といふマオリーの創造說の根本敎義は恐らく何を意味する

のだらうか。

この教義は、靈魂と肉體との定義及びその分離が彼等の統一に於ける材料の二つの表象の分析であるといふやうな材料の統一に對する信仰を確證しないだらうか。かやうな哲學的の直覺といふことは原始人種にあつては稀ではあらうけれども、然しその可然性は動かすことは出來まい。オーストラリアの神學は世界を作り、これを維持してる神樣の行爲のうちに二つの目的を見て居るといふことが認められる。即ち物を產んで行く原因と實のらせられる物質、物を動かす力と支配せられる對象、靈魂と物質である。吾々は物を照らす靈魂と靈魂に生かされ、受け入れる物質との間の不斷の交互作用の

うちに、タアロアがいろ〳〵の姿をしたヒナとの相次ぐ結合のうちに、太陽の永續し、交代する影響を丁度これらの結合の結果に於けるやうに、これらの要素に依つて呼びおこされた光と熱との變化を認めなければならない。吾々はこの大本流が一所になるこの現象を目前に見る。その果實のなかには産み出す原因と實らのせられる物質とが、その運動のなかには物を動かす力と支配せられる對象とが、生命のなかには靈魂と物質とが融合する。そしてかく作られた宇宙はタアロアの皿にすぎないのである。

ヒナとテファトゥとの話から、月と月に住んでるものとは永存するのに、人間と地球とは沈むといふことがおこつてくる。

ヒナは物質を表象する――物質に於ては科學的のいひ方に從へば「すべてのものは變化する、然し何物も消滅しない」――といふことを考へたならば、傳說がその人から由來する昔のマオリーの賢人は吾々のやうにかういふ知識を有つてたといふことを吾々は假定しなければならないだらう。物質は消滅しない、卽ち物質は感覺的に知覺せられる特性を失はない。これに反して靈魂、「精神的物質」卽ち光は變化を檢束する。そこから光線が流れるやうに見えるところの眼を閉ずると、其處に夜と死とがある。それらは光線を投げ返へす――靈魂、若しくは靈魂の最高の動的表象は人間である、そして人間は死なければならない………彼は死ぬる、最早生命に覺めない

ために。――たとへ人間と地球、ヒナとタアロアとの結合の果實が沈んでも、然しタアロアは永遠である。そしてヒナ、物質は何時までも曳かれて行くものであるといふことを吾々に告げ知らす。そこから生命の無限の進化の新しい狀態がおこつて來る新しい結合に共通の願望から、靈魂と物質、光と光が照らさうと努めてる對象とが永遠に滿される。

進化！……材料の統一……昔の食人種の考のうちにかういふ高文明の證跡を發見しやうとは誰が思ひ設けたらうか。私は眞實に何物をも附け足さなかつたといふことを良心に誓つていふことが出來る。

テフラはこれらの抽象論理に關しては全く疑はなかつた。

然し彷徨してるテッパパユスと泣き悲しんでる悪鬼さを星の流れのうちに見ることを彼女はやめなかつた。彼女の祖先がタアロアを天そのもの、彼から出たアテッアスを同時に神及び天空と思つたと同じ意味で彼女は人間の感覺を星の故として居る。如何なる範圍に於て詩的思想が實證科學の進歩を妨ぐるものか、又如何なる點まで最高科學が詩的思想を排斥するものだらうか私は知らない…………

他の見方からすればヒナとテファトウとの話に對していろいろの意味がゆるされる。女性である月の忠告は盲目なる同情とセンチメンタールな無氣力の危險なる忠告であつたゞらう。月と女とは（マオリー人の思想では）物質と同意義を有ち、死

は生命の秘密を孕むるといふことを彼等は知る必要がなかつたのだ。――テファトウの返事は最高智識の嚴格なる、然し先見ある、無私の宣言であつたゞらう。最高智識は能動生活の個人的表現は來るべき高級なるものに地を變へ、勝たれるものに供へられなければならないといふことを認める。以前にはこの返事はなほ適用範圍の廣い國民的豫言の意味を有してたものであつたらう。大賢人が古代に於て民族の生活機能を研究し、評價して、彼等の血液のうちに快癒の力のない死の萠芽を先見し、かういふたのであつたらう。

タヒティは死にたえるだらう、それは死にたえるだらう、再び生き返へらないために。

ララはある宗敎的の恐懼を抱きながら、アレオイスの統治時代にこの島を支配して居たかの宗派、卽ちアレオイスの秘密結社のことを話した。

小供の錯雜した話の中から私は恐ろしい、特殊の慣習に對する記憶を取り分けた。私は前代未聞の罪過にみちみちた悲劇的の過去を想像した。それは好事家の穿鑿には嚴重に守られた秘密に依つて防がれて居たのであつた。

テフラがその知つてるところを晳話してしまつたのち、私はなほくまなくそれを探求した。

かの有力なる結社の傳說的起原はかうだ…：

タアロアの子で、父に次いで神樣のうちでの最高者なるオロはある日人間の間に妻を求めやうと決心した。すべての中より選ばれ、すべてに立ち優つた人種を彼と一緒に人間の間に打ちたてる爲めには美しい、有能な若い女でなければならない筈だ。

彼は七つの天を步き拔いた。そして女神テオウリ Téouri とオアアオア Oaaoa といふ彼の妹達の住んで居るボラ・ボラの Bora-Bora の島の高い山、パイア Païa におりた。

そこでオロは若い武士の姿になり、自分の妹達を若い女に變らし、神樣の接吻に價するやうなものを其處で求めるために島中を旅をした。

オロは虹を利用した。その一の端をバイアの頂にたて、他の端を陸にたて、男女の神樣は谷や潮の上を歩るいた。人々の彼等を迎へやうと急いでるところのいろ〳〵の島で、この旅人達はすべての女の押し寄せて來るやうな華かな、驚かすやうな宴會を催した。

そしてオロは彼等の中を見廻した。彼の心臟は惱まされた。何故ならば彼は愛情を見附けた、然し彼は愛さなかつたからだ。人間の娘達の上には誰にも彼の眼は永くはとゞまらなか

つた。何故ならば彼は自分の夢見てた德行も長處も發見しなかつたからだ。

無駄に探し廻つて丶多くの日が經つて行つた後に、ボラ・ボラの島のヴァイタペ Vaïtapé で、アヴァイ・アイア Avaï Aia の小さい湖で浴をして居る稀れに見る美しい若い女を打ち見たとき彼は天に歸らうと決心した。

彼女は丈が高かつた。そして太陽の熱がその美事の肉の上をやき、照らしてた。然し愛戀の全き魅力はその頭髮の夜のうちにねむつてた。

恍惚としてオロは妹達に若い女を說得することをたのんだ。妹達派遣の結果をバイアの頂きで一時待たうと彼自身は引

返へした。

女神様達は挨拶をして若い女に話しかけ、そしてその美を讃め、彼等がボラ・ボラの一ケ所、アヴァナウ Avanaü から來たことを話した。

——私達の兄があなたが兄の妻になることを御承知下さるかどうか伺ひたいんですつて。

ヴァイラウマティ Vaïraümati ——これが若い女の名であつた——は探ぐるやうにこの見馴れない人達を見つめて、そして答へた。

——あなた方はアヴァナウからいらつしたのではない。然しあなた方のお兄様は頭領であり、又お若く、そしてお美しい。

いらつしやると好う御座いますわ。ヴァイラウマティは妻になるでせう。

ラオウリとオアアオアは、彼が待たれてるといふことを知らすために速刻バイアに登つて行つた。

直ぐにオロは以前のやうに虹に乘つてヴァイタペにおりた。ヴァイラウマティは彼を迎ふるに美事な果物を以て占領された食卓と奇麗な敷物と珍奇な織物で以て部屋を支度した。

彼等の怡樂と力とに神々しさを持して、彼等は森や野に、海のほとりに、Tamaris や Pandaanus の葉蔭に愛戀に耽つた。毎朝神樣はバイアの頂きにのぼり、毎夜彼は女とねるためにおりてくる。

他の人間の娘は誰一人この世の姿をした彼を打ち見ることは出來なかつた。

常にパイアとヴァイタペとの間に張られば虹が彼の道の役をした。

荒れさびた七つの空にオロ逗留の報がなくなつてから幾度も〳〵日は輝いて、又消えた。それでタアロアの二人の息子オロテファOrotefaとオウレテファOürétéfaが人間の姿になつて、彼等の兄を探さうと出發した。永い間彼等は彼を見出せずに島を方々うろついた。けれど到當彼等はボラ・ボラでヴァイラウマティと聖マンゴ樹の葉蔭に憩ふて居た若い神樣を見出した。

彼等は若い女の美はしさに全く驚いたのであつた。そして

驚嘆の標として贈物を捧げやうと思つた。オロテファは豚に、オウレテファは赤い羽に變つた。それから豚と羽とを無くなさずに再び人間の姿になつた。そして彼等は贈物を有つて戀してる人達に近寄つた。オロとヴァイラウマティとはこの立派な二人の旅人をよろこんで迎へた。

その夜に豚は七つの仔を產んだ。そのうちで第一のは後々の用のために保存せられた。第二のは神樣達に供へられた。第三のは客のもてなしに供へられ、この未知の人達に供へられた。第四のは愛戀の光榮のための犧牲の豚と呼ばれた。第五と第六のは種類を殖やすために最初の生母になるまで保存

された。第七のは到當全體で熱い石の上で炙かれた――マオリーの習慣に依れば淨められたのだ――そして食はれた。

オロの弟達は再び天に歸つた。

その後二三週間たつてヴァイラウマティはオロに姙娠したことを告げた。

そのときオロは保存されてあつた七つの豚の第一のをとつてライアテア Raïatéa. の方へ、神ヴァポア Vapoa のお堂なる大きいマラエに行つた。

其處で彼はマヒ Mahi と呼ぶ男に會つた。その男に彼は豚をくれて、いふた。

――Maïi maïtaï o é téinéi boüaa (こ)の豚をとつて、それを面倒

を見ろ）

そして嚴に神樣は言葉をつゞけた。

――これは神聖な豚だ。その血のなかに私から出た人間の血統が彩られてある。一體私はこの世界に於ける父である。彼等は自分をアレオイスと呼ぶだらう。私はお前にアレオイスの權利と名前とをやらう。私自身は最早此處には永くはとゞまることは出來ないのだ。

マヒはライアテアの頭領を訪ねた、そして彼に出來事を語つた。頭領の友達にならないでは、彼の自分に委任された神聖な寶を守ることは出來なかつたのだ。彼はいひ足した、

――私の名はあなたの名、あなたのは私の名である。

頭領は滿足した。彼等は二人してタラマニニ Taramanini といふ名をつけた。

そのうちにオロは再びヴァイラウマティの處に歸つた。そして彼が彼女に Hoa Tabou té Raï (天の神聖なる友達) と呼ぶことを命じた小供を彼女は產むだらうといふことを彼女に告げた。

それから彼はいふた。

――時は滿ちた、私はお前を置き去りにしなければならない。

彼はそれから大きい火の柱に變つた、そしてボラ・ボラの最高峯、ペリレレ Periréré の上まで空中にたちあがつた。そして此處で彼は泣いてる妻と驚いてる人民との眼から消えた。

Hoa Tabou té Raï は偉い頭領になつた、そして人間に多くの善事をなした。彼の死んだときには彼は天國にあげられた。其處にはヴァイラウマティ自身も女神の地位を占めて居た。

[*]

オロは正しくこの島に——何時かは解らないが、婆羅門の敎を有つて來た、諸國を遍歷する婆羅門の僧侶であつたといふことが出來るだらう（オーストラリアの宗敎のうちにこの痕跡を私はすでに指示して居る）。

この純粹無垢の混り氣のない敎義のうちにマオリーの天才は目を覺した。理解することの出來た聖者はお互に認めて、一致した――勿論完全に人民から別れて――規定された掟を行はんために。彼等の種族のうちで他のものよりは多く啓蒙せられて、彼等は忽ち島の宗敎並に政治上の權力をうばつて、重大な特權をかため、多島海の歴史のうちに黄金時代に作つた强大なる優越權の基を置いた。

彼等は書くことは知らなかつたやうに見へるが、アレオイスは眞當の學者であつた。彼等は「神樣の諺」を言葉一つ一つを非常に苦心をかけて綿密に穿鑿して幾晩も夜を徹した。彼等を説明することは年餘の勞苦を要した。高々好く行つて註

釋を附けられる位の彼等だけにしか解らない神樣の諺がアレオイスに精神的中心の基礎を作り、熟慮といふ習慣をつけ、超人的使命を彼等に賦し、その前には誰をも屈せしめた威嚴を與へた。

これと全く等しい組織が歐羅巴のキリスト敎並に封建制度の中世にある。そして私はかの宗敎並に戰鬪團體、かの宗敎會議よりもなほ恐ろしいものを知らない。それは神の名に於て判決を下だし、生死に關して絕對に振舞つたのである。

アレオイスは人身御供を神樣は滿足せられるといふことを敎へ、そして自からも自分の子を長子を除いて外は皆マラエに供へた。この腥い掟のシンボルは神聖な豚である第一の

外は皆殺されたといふ七つの豚の傳說であつた。然し吾々はこの蠻行に就いて輕卒に批難することはゆるされない。

多くの原始的國民に任された恐ろしい義務といふものは社會的風習並に一般的利益の深い根據を有つて居た。マオリーの種族がかつてそうであつたやうに、非常に繁殖力の強い種族にあつては無限なる人口增加は國民的並に積極的生存を脅かす。島の生活は實に骨の折れない、そして必要なものを作るのに大した勤勞を要さなかつた。粗末なピローチではとても近寄れない、無際限の大洋に圍まれ甚だしく制限せられて居る範圍は斷えず增加して行く人民にとつては忽

ち缺乏勝ちになるのであつた。海は魚類を充分に、森は果物を充分に最早供給しなくなつた。飢饉は近づいて來た、昔は何時もそうであつたやうにその結果は人を喰らふといふことになつた。――大人を殺すことを避けるためにマオリー人は小供の犠牲に限つた。外ではアレオイスが現はれたときには、人を喰らふことはすでに行はれてた。アレオイスは飢饉と戰ひ、その原因を除くために小兒殺戮を行つた。この小兒殺戮といふことは、この主張の不淨なる喜劇が道化芝居作者のお娯みに役にたつたものならば、恐らくは風俗の敎化として示されるべきものだらう。アレオイスはこの繁殖をたちきらんがために恐らく多大の力を用ひなければならなかつたのだ、そし

て彼等は人民の眼の中に自分等に神樣の絕對的權威を附けさしたことに依つて達した。

到當小兒殺戮は種族の爲めの生存淘汰の有力なる手段となつた。初產といふ驚く可き權利、生命そのものゝ上にある權利が人民の力を減せずに存した。即ち甘味を皆吸ひつくしてしまうといふ有害な結果を免がれた。このことはすべてこれ等の小供の內に打ちこはすことの出來ない自負の意識を養つた。この自負の原力と最後の血とは吾々がこの絕滅に迫つてる大種族の最後の萠芽のうちに今日なほ感嘆するところのものである。

死の不斷の例と頻繁なる交通とは遂に崇高な慰安の敎であ

つた。武士は苦痛を輕んずることを知つてた。そして全國民は苦痛に際して强い祥福的感情を發見する。この感激は熱帶地方のだらけと不斷の仕様事のない無神經な倦怠を防いだ。マオリーの衰運はこの犧牲を法律的に禁止するとともに始つたといふこと、次に彼等は其の時から道德的の力と肉體上の生產力とを失つたといふことゝは歷史的事實である。若しこのことがこれらの原因でないとしても、それに思ひあたるところがある。

恐らくアレオイスは犧牲といふことの深い意味とそのシンボリカルな必要とを知つてたのだ……賣淫は彼等には神聖な義務であつたのである。吾々の間ではそれとはことなつてる。

吾々歐羅巴人が文明の善行を法外に運びこんだ後にもタヒティでは賣淫は決してやまなかつた。賣淫は益々榮えた。然しそれは義務でもなく、神聖にもならない、唯何等の尊嚴もなく、ゆるすべからざることである。

宗敎上の地位は父から子につたはる。その開始はすでに子供の時に始まる。

結社は元來十二の組に分たれてあつた。その首長は十二人の上流のアレオイスであつた。次に第二級の地位を有するものが來、そして最後に弟子が來た。この種々の階級は腕、兩脇、肩、脚、踝の特殊の文身に依つて區別される。

アレオイスのマタムア、古代の國王卽位式のマオリーの光景はかうだ。

新統治者は、華麗な着物を着て、島の貴族にとりまかれて彼の宮殿を去る。彼の前を頭髮に珍奇な羽毛をつけたアレオイスの首長等が歩るく。

彼はお供を從へてマラヱに行く。

彼を閾の處で待つてる僧侶達は彼が見えると大聲に喇叭の響と大鼓の音とで、儀式の始まることを知らす。

それから王樣と一緒にお堂のなかに這入ると、彼等は人身御供、死骸を神樣の像の前に供へる。

王樣は僧侶と一緒に祈禱をあげ、歌ふ。その後で僧侶が人身御供の二つの眼を拐ぎとる。僧侶は右の眼を神樣に、左の眼を王樣に捧げる。王樣はこの血だらけの眼を丁度喰べさうに口を開く。然し僧侶はそれを取り戻して、再びもとの體に納める。

註――この掟のシンボリカルな意味、人肉を食らうことを明に禁することの誤解されないやうに。

それから神樣の像が僧侶達から擔がれる彫刻のある擔ひ臺の上におかれる。二人の上役の僧侶に擔がれて王樣は神樣の

像につゞく、丁度出立でゞもあるやうにアレオイスからお供をされて海の岸まで行く。途中僧侶達は喇叭を吹き、大鼓をならしつゞける。

群集は謹み深く、靜にあとからやつて來る。

入江のほとりにはこのお祭のために綠の枝や花を以て飾られた神聖なピローヂが動いて居る。先づ初めに偶像がそのなかに降しこまれる。次に王樣は着物を脱ぐ、そして僧侶達は王樣を海の中につれて行く。其處でアテゥアス・マオ Atuas Mao が彼を潮で洗ひ、彼を可愛がる。

かうして王樣は、最初はお堂の中でされたやうに、二度目に神樣の現前で海の接吻に依つて淨められる。そして王樣は

神聖なピローヂにのぼる。其處で上役の僧侶が maro oüroü で彼の帶をし、彼の頭のまはりには統治の紐 taoü mata を卷く。

前方の小舟に立つて、王樣は人民にあらはれる。

それを見ると人民は到當永い間の沈默を破りて、到る處にお祝ひの叫がひゞく。

——Maëva Arii!(國王陛下萬歲)

最初の大歡呼の終つた後に王樣は神聖なる臺の上にねかせられる、其處には矢張り偶像が置かれてある。そしてすべての人は前と殆ど同じ樣な順序で同じ道をマラエの方に行く、再び僧侶達は偶像を、上役の僧侶達は王樣を擔いで、行列はまた音樂と踊とで始められる。

人民は後からつゞく。然し今は彼等は歡喜に醉ふて始終叫ぶ

——Maëva Arii!

偶像は恭しく神壇に安置される。

それで以て宗敎上の祭はおはる。そして人民のお祝が始まる。

お堂では神様に、海では自然にされたやうに、王様は人民に淨められる。——敷物の上にねかされて王樣は今や國民の最高の誓忠を迎へなければならない。

野生の國民の狂ほしい誓忠。

一人の人間に對して愛を表現する群集の全部。この人間は

王樣である。群集とこの一人の人間との間に於ける芝居は怖ろしいまでに、驚くまでに大袈裟である。明日は彼は君主である。彼は處分すべき筈の運命を意のまゝに處理する。そして未來は全部彼のものである。唯この時間だけが群集のものである。

全く裸體で、淫亂なる踊をなして男女は王樣をとりまく、そして王樣の體のある處と彼等のある彼とが觸れるやうに一生懸命になる。接觸といふことはその際常にさけられない。そして國民の狂奔が馬鹿の限りをつくし、平和なる島全體が恐ろしい叫を以て反響される。そして段々にやつて來る黃昏が物につかれた狂氣の群集の夢幻の姿を見せる。

然し急に喇叭と太鼓の響がする。

誓忠は終に、お祭りは終りになる。歸りの合圖がひゞく。非常に狂奔してた人も鎭まる、すべてが靜になる、そして終に絕對的靜肅がやつて來る。

王樣はたちあがる、御供につかれて、嚴に、堂々と宮殿に歸る。

殆二週間以來、餘所では餘り出て來ない鯔がぶん〳〵いふて居る。それが辛抱が出來ないやうにした。

然しマオリー人はそれを喜んだ。何故なら鯖や他の魚が底から表面にあがつて來る。鯔は漁業の時期、勞働の時期を告げ知らせたからなのだ。タヒティでは勞働は滿足であるといふことをお忘れになるな。

皆は各自に網の丈夫さや釣道具の吟味をした。女や小供は常とは違つた熱心を以て海岸や、陸と岩との間の珊瑚礁の上

に網、むしろまあココスヌスの葉の長い四目格子といつたものを曳くのを手傳つた。こんな仕方で餌にする魚がとられる。それは鯖には最も美味なのだ。

殆三週間を要した準備の終つたときに、二つの大きい一緒に結ひられたピローヂが海上におかれる。それの前面に釣針のついた大變長い竿がもたせかけられる。その竿は後を縛つてある二本の繩で早く揚げられるのだ。魚は咬みつくやいなや直ぐ樣引き揚げられ、小舟の中に入れられる。

ある天氣の好い朝私達（私は――無論――お祭の際にも一緒だつた）は海にのり出した。ところが幸に私達は直ぐ樣珊瑚礁の先きに出られた。私達は可成り遠くまで出かけて行つ

た。漕いで行くときに水の上に頭をだして此方を見て居る鱸を私は見た。
漁夫は皆非常に喜んで、急いで舵をとつた。
私達はマラの洞穴と向ひあつた鯖穴 Thunloch といはれる場所に來た。そこは大變に水の深い處なのだ。

註――Mara といふ字は佛教徒の言葉のうちにある。佛教では死といふ意味だが、そこから出て罪といふ意味になつた。

鯖は夜は其處の沙魚の來ることの出來ない深海でねむるのだと人々はいふてる。
魚を探しながら、海鳥の群は穴の上を飛んで居るのだ。一匹表面に出て來ると忽ち鳥は恐ろしい速さでそれを目がけて

おりて來、嘴に嗌へるとまた高くとんで行く。

かういふ様に海にも、空にも、私達のピローヂにすらも血と殺戮の思想が支配して居る。

何故長い釣絲を鯖穴のなかへ投げこんでおかないのかと私が連れに尋ねたら、彼等は、そんなことは出來ないんだ、神聖な場所だものと答へた。

――海の神様が其處にお居でなんだ。

私は穴の底の傳説を想像した、それをどうか私に話させくれ。

*

タヒティの海神のなかのロウア・ハトウ Roüa Hatou は此の場所の海底にねむつて居る。

一人のマオリー人がある時無鐵砲にも其處で魚をとらうとした。そのとき釣針が神様の頭髪にひつかゝつた、神様は目を覺ました。

怒つて彼は、誰が彼の安眠を妨げるやうなこんな勇氣を有つてるのか、見やうと表面にあがつて來た。そして罪人が人間であるのを見たときに、彼は一人の放埒を罰するために人間全體を絶滅しやうと決心した。

だが然し刑罰をのがれた――言說以上の御慈悲に依りて――

——犯罪者自身は。

神様は彼に家族全體を連れてトア・マラマ Toa Marama に、そのうちあるものには島、卽ち山に、他のものにはピローヂ、卽ち「箱船」に行くことを命じた。

漁夫が彼の家族と一緒に指定された場所に赴いたときに、海の水はたかまり始めた。水は徐々に一番高い頂を蔽へてしまい、すべての生物は、かの Toa Marama にのがれたものまでが、そのなかで死んだ。

後になつて彼等は更に新しくこの島に繁殖した。

註——この物語はノアの大洪水のマオリー人の試みた多くの說明の一である。

私達は鯖穴を後に見棄てゝ去つた。ピローヂの船頭は竿を海に入れて針を投げる人を指定した。

永い間待たれた、鯖は一匹もかゝらない。

外の漕手がその順番にやつて來た。今度は美事な鯖が咬ひた、そして竿が下に曲つた、四本の頑丈な腕が後の紐を引いたので竿は高くあがつた、そして魚は表面に見えた。然し同時に大きい沙魚が急に波の上を驅けた。恐ろしい一と咬、二た咬、そして最早釣針にはもげた頭の外何もなかつた。

それから船頭は私に合圖をした、それで私は針を投げた。ほんの僅の間に私達は大きい鯖を釣つた――多の人は氣がつかなかつたが、私は近所の人達がくすくす笑つて私語してるのをきいた。――棒で頭を打たれて死んだ奴は小舟の底に引繰り返つてた。そして今は光を放つ鏡に等しいその體は澤山の輝く光線を放つてた。

二度も同じ樣に私は仕合せだつた。

私の連れはよろこんで私を祝して、私を幸運見と呼んだ、そして私は得意になつて反對はしなかつた。

然し皆が一緒になつて賞めるなかに、最初の時のやうに譯のわからない笑と私語とを私は見分けた。

釣りは晩までかゝつた。餌の小魚がつきたときには太陽は水平線を赤い焔で染めてた、そして私達の小舟には美事な鯖が十匹も積まれた。

私達は歸りの用意をした。すべてが整ふ間、私は若い男に全く低い聲で取り交はされた言葉の意味と、二度も私の漁獲と一緒だつた笑とを尋ねた。彼は返事をするのを躊躇した。然し私はゆるさなかつた、何故なら私はマオリー人の抵抗力といふものが如何に小さいか、又如何に速く頑强な肉薄にまけるかといふことを知つてたからだ。

到當彼は私に打ちあけた。鯖が釣針に咬みつくと——私のは二匹ともそうだつた——その人のワヒナは家で不義をして

居る。

私は信じないで笑つた。

そして私達は歸つた。

夜は熱帶では急に入りこんで來る。それに先きんずることが大事だ。二十四の輕快なPagaien（杓子の様な舵）が同時に水につかつた。そして元氣をつけるために漕手は拍子をとつて大聲で叫んだ。私達のピローヂは燐光のする波狀を後にひいた。

私は狂はしい遁走をやつてるやうな心持になつた。激怒した大洋の統治者が私達を追ひかけ、怪異な不定な姿の群のやうに、驚かされた、珍らしきもの好きの魚が私達の周りに急いで來た。

二時間して私達は一番外の岩に着いた。浪は其處は強い、航行は航路故に危險である。砂地の前へピローデを正しく舵をとることは容易ではない。然し土人は熟達して居る。私は全く恐くはなかつたけれども、非常な興味を以て、この美事に行はれる手際を追及した。

私達の前には陸は炎をあげてる火で照らされた。——それはココスヌスの枝の大きい松明であつた。輝いてる海岸の砂の上に陣取つて居る漁夫の家族の顏附きは異樣であつた。あるものは動かずに坐はつてた、外のものは松明を振りながら海邊を驅けてた。小供等はあちこちに跳ねまわつてた。そして遠くには淸澄な叫のするのを聞いた。

輕々と走つて私達のピローヂは海邊に着いた、そして獲物の分配が直ぐに始まつた。
魚は皆地面の上におかれた。親方が人の數――男、女、小供――漁獲と餌の魚捕りに關係したゞけの同じ部分に分けた。
それは三十七に分たれた。
時を失することなく、私のツヒナは斧をとつて、木を裂き、そして火を點けた。その間に私はなほ少しみいゝなりをなほして、夜が寒いのでかいゝらだを包んだ。
私達二人の分配のうち一部分は煮て、他をテフラは生のまゝで貯いた。
それから彼女は魚釣りでのいろ〳〵の出來事を根を掘つて

きいた。そして私は親切に彼女の好奇心を滿足さした。彼女はすべてに滿足して、小供らしく晴々しくなつた。そして私は秘めてた考を氣づかせないやうに彼女を觀察した。私の心の底には何等の原因もなくて鎭められない不安が目を覺ましてた、私はテフラに問をかけてやらうと焦つた——ある問を……そして「何のために?」と自問しても、それは何の役にもたゝなかつた。「誰が知るものか」と私は自分に答へた。

眠りに就く時が來た、そして私達二人が列んで體をのばして横になつたときに、私は突然尋ねた

――お前は正氣かい。

――え。

――そんならお前の男はお前の氣にいつたのかい。

――私、好きな男なんか居ない。

――嘘をいへ、魚が裏切つてるよ。

テフラはおきあがつて、じつと私を見つめた。彼女の顔附

は珍しい神秘的な莊嚴な表情をしてた。それは私にには見馴れないものであり、又彼女の明るい全く小供らしい顏にまだ一度も見たことのなかつたものであつた。

私達の小さい家のなかの陽氣は變つて了つた。私は崇高なるもの丶私達の間に高まるのを感じた。私は意志をまげて信仰の力に屈し、天上からの福音を待つた。私は福音の來たるだらうといふことを疑はなかつた。たとへ吾々懷疑説の無駄な疑義が、それが迷信にもせよ、この輝いた、尊い熱情に相對して、なほその力を自分の上に檀にしやうとも。

テフラは好く戸がしめられてるかといふことを確めるために、靜に戸の方に行つた。そして部屋の中頃まで戻つて來た

ときに、彼女は次の祈禱を捧げた。

私をお助け下さい。私をお助け下さい。
今は夕で御座います、夕には神様がお居でになる。
私をお守り下さい、おゝ私の神樣。
私をお守り下さい、おゝ私の御主。
だぶらかしや惡い告げ口の前に私をお守り下さい。
私をお守り下さい、餓に死にますことの前に、
惡の前に、そして呪咀の前に、
私をお守り下さい、土地の分け方の爭の前に、
私共の間に平和の支配することの出來ますやうに。
おゝ神樣、狂氣の武士の前にお守り下さい。

私をお守り下さい、私を脅かすもの丶前に、
苦しめることをよろこぶもの丶前に、
その頭髪がたえず逆立つてる人の前に。
私と私の魂とが生きることの出來ますやうに、
お丶神様。

この夕本當に私はテフラと一緒に祈つた。
彼女がその祈禱を終つたときに、彼女は眼に涙をためて私の方に來た、そして自分を打つてくれとたのんだ。
この表情の深い眞摯の前に、この生きてる像の完全なる美の前に私はテフラに宣誓された神様が彷彿するやうに思つた。
私の手は永久に呪はれる、若し私の手が自然の傑作に對し

て自分をたてやうと敢てしたならば。

彼女は自分を打つてといふ懇願を繰返した。

——なさらないのなら、あなたは永く怒つてゝ病氣におなりだ。

私は彼女に接吻をした。

そして誤解なしに彼女を愛する今、私が彼女を驚嘆するやうに愛する今、佛陀の言葉が私の唇邊に來たつた。

「そうだ、人は柔和に依つて憤怒を鎭め、善に依つて惡を鎭め、眞に依つて僞を鎭めなければならない。

この夜は神々しかつた、外のすべての夜よりも貴かつた——一日は輝いてあけた。

朝早く彼女の母が鮮しいココヌヌスを有つて來た。

一眼見て彼女はテフラに尋ねた。

彼女は知つた。

優しい表情をして彼女は私にいふた。

――あなたは昨日漁とりにいらつしたつて、お變りは御座いませんかつたか。

私は答へた

――早くまた行きたいと思ふ。

私はどうしてもフランスに歸らなければならなくなつた。
重大な家の事情が私を呼び戻した。
愛相好き土地、自由と美の故鄕よ幸あれ。
二年たつた、そして私は二十年だけ若くなつた、私は來たときよりも野蠻に、然し賢くなつた。
野蠻、無知はこの老いた文明人に多くのこと、藝術のうちに生き、幸福であることを敎へた。中にも彼等は私自身をもつと好く知れといふことを敎へた。私は彼等から唯深い眞理をきいたのだ。
それはお前の奇蹟であつたのだ、お前、秘密多き世界よ。

お前は私に光を有つて來た。そして私は古代の美と自然の消すことの出來ない若々しさを驚嘆して成長した。

お前の人間の心と、咲くことをやめない、そしてその香を最早誰も吸込めない、その花とへの理解と愛とは私を善良にした。

*

私が乘船するために、はとば Quai を去つたときに、私はテフラを最後に見た。

彼女は終夜幾晩も泣きあかした、今は彼女は涙もつきて、悲しげに、然し石の上に脚を垂れ下げて坐つてた。そして彼女の頑丈な、しつかり足は汚い水に觸れてた。

朝耳の後につけてた花は萎びて膝の上に落ちてた。

此處にも、彼處にも彼女と同じ樣に外の人は疲れて、默つて、悲しげに、ぼんやりして、私達を永遠に遠く運んで行く船の濃い烟にみされて居た。

そして船橋から私達には、私達が段々隔つて行く間、望遠鏡を有つてその唇の上にはなほ永くかのマオリーの歌を唄ふてるやうに思はれた。

南、東の穩かな風よ
それは私の頭の上で可愛い遊戯を共にする、
隣の島へ急いでおいで。
そこでお前は可愛いらしい樹蔭のなかで
私をすてた　あの人に會はう。
淚にくれてる私を見たと　告げてくれ。

（完）

附録

「繪畫は」



Dans l'ile Marquesas

繪畫は最も立派な藝術である。繪畫のなかにはあらゆる感じが包含されて居る。一目見て誰でも自分の想像の振動に從つてローマンスを作ることが出來、又深い回想に依つて自分の心臟をみたすことが出來る。何等の記憶の浪費といふことがない、すべては瞬間を包容する——完全なる藝術、それは他のすべてのものを一つにし、それらを完成する。音樂のやうに繪畫は感覺を通じて心の上にはたき、調和のあるトーシは音響の調和に該當する。然し音樂には求められない統一に

繪畫は達する。音樂は音の繼續といふことに基礎をおき、その發端と結末とを一緒に纏めやうと思ふならば、精神は疲かれてしまふ。耳は全體として見るに眼よりは低級な感覺である。聽覺は唯一度に一音だけである。之に反して視覺は一目のうちにすべてを包攝し、そしてその際自分の思ひのまゝに單純化する。

人は音樂を聞き、畫像を見るといふと、自分の夢を靜に自分に與へることが出來る。書物では人は著者の奴隷になる。

文章家は情緒への道を發見する前に、知能に自分を向けなければならない。熟慮に依つて達せられた感じは直接性を失はう。

唯視覺だけが直接の効果を產む。書物を判斷するためには知能と智識とが要る。繪畫と音樂とを判斷せんためには、知能と藝術上の智識との外にまだ自然に於ける特別なる感じが要る。一言でいへば、人は藝術家として生まれなければならないのだ。多くのものは然し呼びかけられては居る、そして唯少數のものだけが選ばれる。各個の觀念といふものは形式化せられる、然しそれは感情通りの感じとはちがう。彼の恐怖、彼の熱中の瞬間を制御せんためには、どれだけの努力が要るか。變愛は往々にして屢々最初の瞥見に於ておこるではないか、そして變愛は何時も盲目ではないか。そしてその際思想は自から精神と呼ぶ、本能、神經、情緒は物質の一部分

を作るのだ。何といふアイロニーだらう。

一番不定で、一番摑みにくい、一番變はるものが物質。思想は感じの奴隷。

人間以上に自然はたつてる。

人間の思想が言葉に依つてあらはされる、それが文學である。

オセロが猜疑に胸を喰ひつぶされて、デスデモネを殺したときに、オセロがたとへどんなに生々と描かれやうとも、オセロが運命を孕んだ額をして部屋のなかに突進した態を自分の眼を以て見たときに、私の印象は幾倍强かつたらう。これ故に諸君は諸君の作品を完成するために舞臺が要るのだ。

諸君は暴風雨を人の氣を惹くやうに敍述することは出來る。然し暴風雨の感じを與ふることは諸君には手がとゞかない。數の場合のやうに器樂は基底に統一を有つてる。全體の音樂の組織はこの原理の上にたつてる。耳は分音に慣れてる。それで諸君は他の基底をとることが出來る、正音、半音、四分音をつゞけてとることが出來る。この範圍の外では音調は不調音に陷る。眼は不調音を感ずるには耳よりも慣れてない。然しその代りもつと複雜な、もつと大きい錯雜した分音が多くの統一に相對してたつてる。

樂器は一つ音から出立する。繪畫は多くの音から出立する。黑を以て始め、白に至るまで分ける——これが最初の統一、

一番簡單な、一番多い、從つて最も掴み易い統一である。然し虹のすべての色をとり、それらに複合された色に依つて作られた統一を附け足し、そして統一の驚くべき數に至る。畫家は色彩の法則を余り知らず、公衆はそれを余り理解してないといふことは、この豐富に際して驚くほどのことではない。然し自然に密接な關係にあらはれる爲めには如何なる充實が要る。

畫家が色を混ぜずに並べておくといふと、ひどく非難をする。然しこの領分に於ては私達は勝利を主張しなければならない。私達は自然をこの論爭に於ける最强の後援に呼び寄せることが出來る。何故ならば自然が一體そうなのだから。

赤と並んだ綠は混合色の赤褐色を生ずるのではなく、二つの振動してる響を生ずるのだ。赤と並べてクローム黄をおくと――三つの色響が雙方からお互に豐富になり、そして第一のトーン、黄の强度を增す。

黄の代りに靑をおくと、そうすると力に依つて振動し、お互に雙方から給しあつて、三つの違つたトーンが出來る。黄の代りに菫をおくと、そうすると赤の調子の唯一つの複合したトーンが出來る。

結合は無制限である。色の混ぜ合せは汚ないトーンを產む。唯一つの色は生硬である。そんなものは自然には存在しない。それは虹に於て明に見られる。然し豐富な自然は一つの色が

他の色からおこつてくるやうに意志され、變らざる秩序に於て相列んで私達にあらはれるやうに用心してる。

さて諸君は自然よりも不充分な手段を有つてる、そして自然が諸君の手のなかに與へたものを斷念しやうと判決を下してる。諸君は自然のやうにそんなに多くの光をお有ちか、又大陽のやうにそんなに多く熱をお有ちか。そして諸君は誇張といふことをお仰る。然し諸君が自然の後に瞠若たる塲合に、どうして諸君は誇張を望めませう。

諸君が誇張といふことで各自の見惡くい平凡な作品を理解したとしても、諸君はこの意味に於て正しいのだ。諸君の作品も亦臆病で光澤がないといふことを私にいはせて下さい。

それは、若し調和を害するものならば、誇張されたのである。だが調和の法則があらうか――ある。まさしく色彩畫家の感情は自然の調和に該當する。歌ひ手のやうに畫家も時たま間違つて唄う、畫家の眼に調和がかける。

段々を通つて後々に調和の方法が發達する。それはかうだ。人はアカデミーに行くとか、若しくは多くの畫室に行くとかいふやうなものだ。實際繪畫の段々を二つの範圍に分ける。先づ物を素描することを習ふ、次に彩畫をならふ。それは、すでにきまつたコントゥルに色をつけ、像を描くといふことゝ同一のことなのだ。

今までにこの進み方で唯一つのことが明になつたといふことを私は知らねばならない。それはかういふことだ。人は色彩といふことを附けたりの余事と見たといふことである。描く前に好く形をとるといふことが大事だ――このことは何等の矛盾をも生ぜしめないトーンのなかに決算せられる。このいゝいゝえらいとんまなことが何時もかういふ仕方でいはれる。

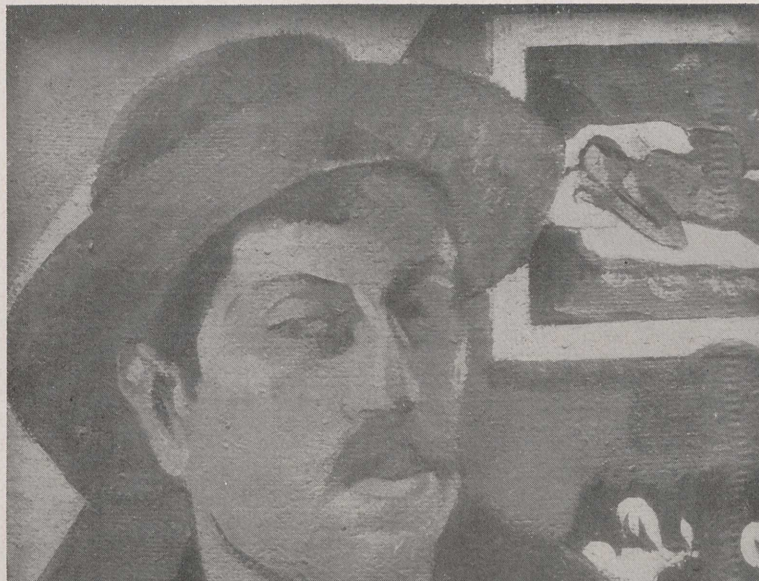
人は手袋の代りに長靴をはめるか。人は素書は色彩に依つてきめられない、その反對だといふことを眞面目に證據たてることが出來るか。色彩に依つてみたすことに依つて同じ素描が小さくも、大きくも見せられるといふことを私は自分に證據たてる義務を帶びてる。人はレンブラントの頭を全く同

じプロポーションで素描したり。色彩が同時に不調和になる間に、人は如何なる無形式に達するかといふことを納得せんためにルーベンスの色の配合をやつてみたりする。

一百年來人は素描を要求する爲めに非常なる總額を支出した。畫家の數は一歩を先きへおこさずにのぼつた。私達は今日如何なる藝術家を賞讃するか、流派と戰つてるもの、彼等の智識を自身の自然の觀察から引きだしてるものをだけだ。

挿畫目次

Portrait de l'artiste I

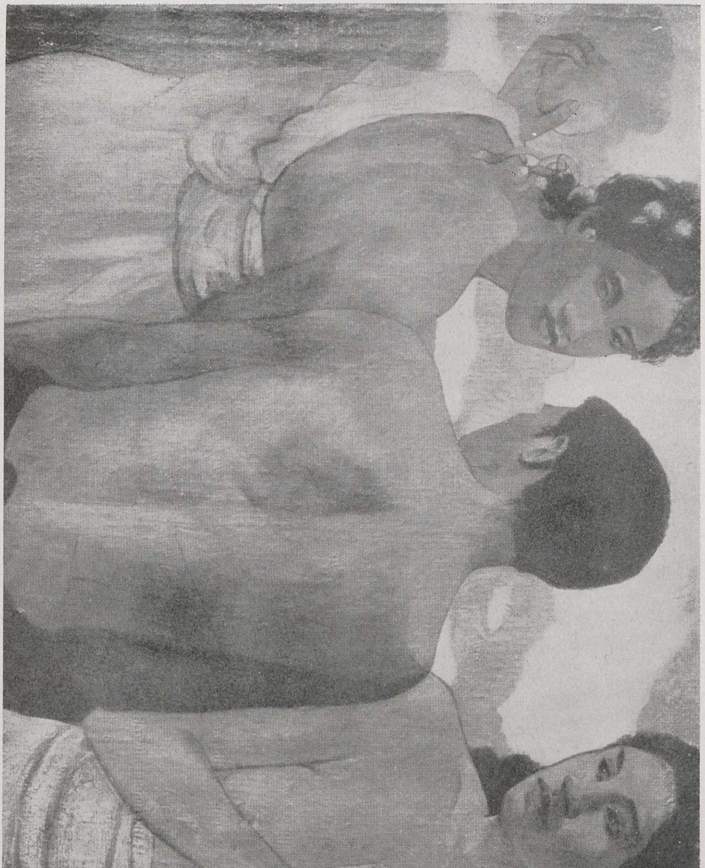


Portrait de la mére de l'artiste 2

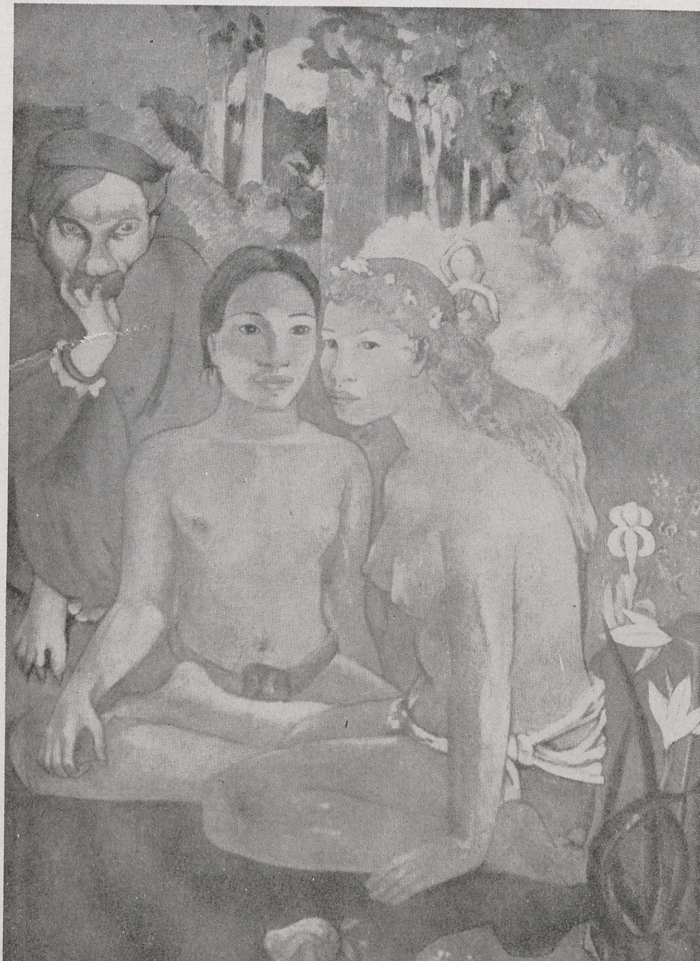




Les femmes et le cavalier 3



Contes barbares 4

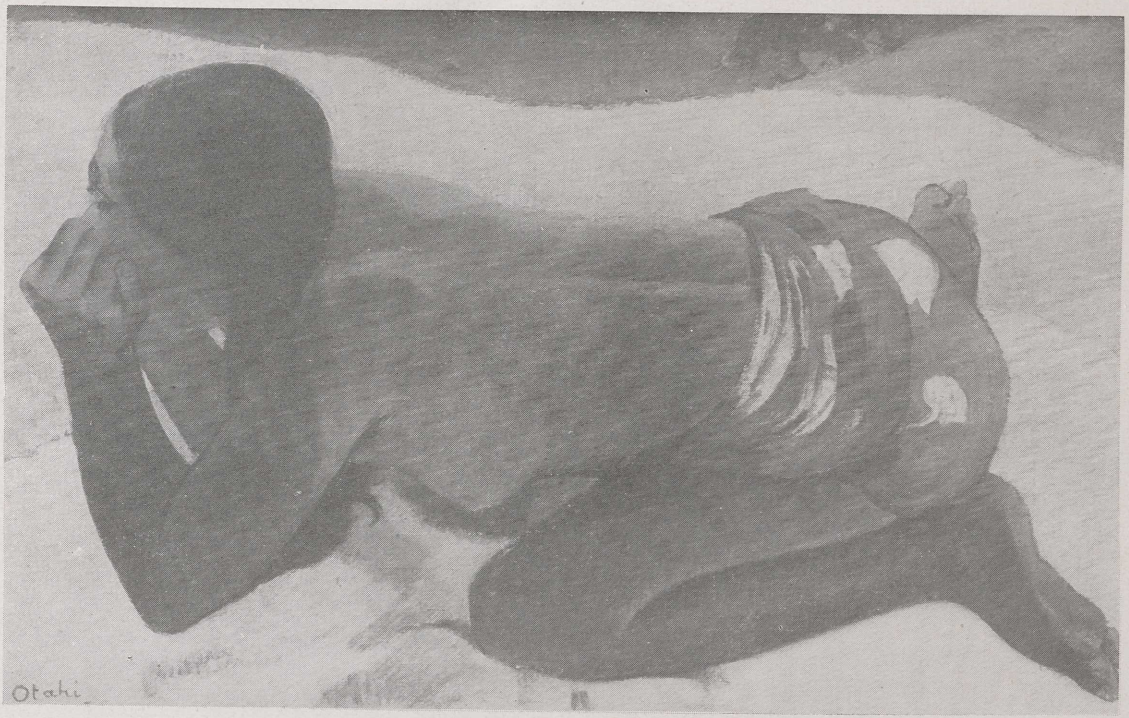




Eh quoi tu es jalouse 5



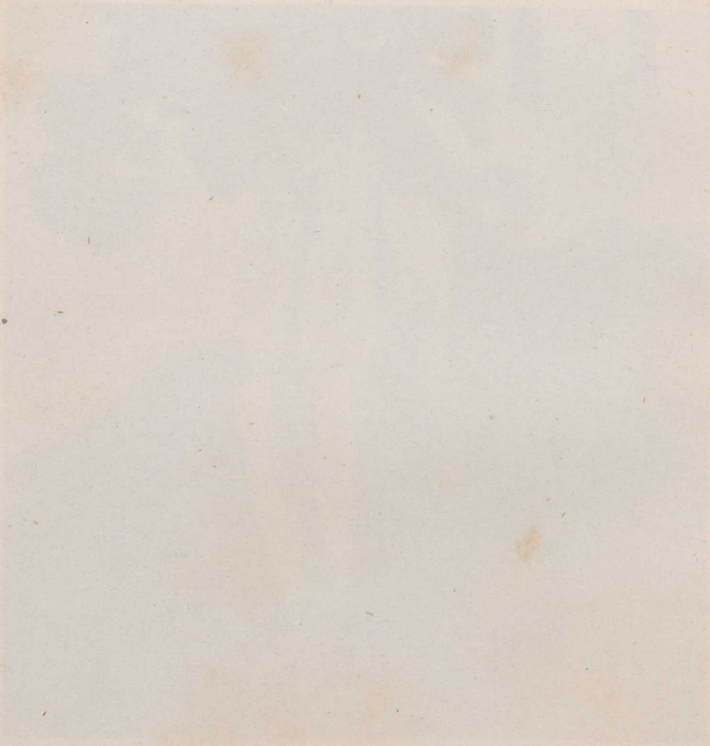
Otahi

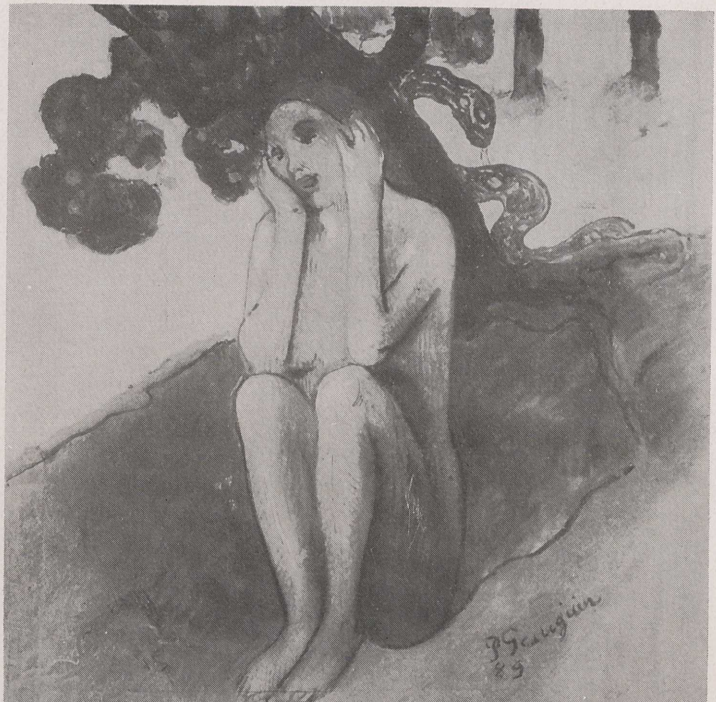

Otahi

L'esprit veille

7






P Gauguin
89

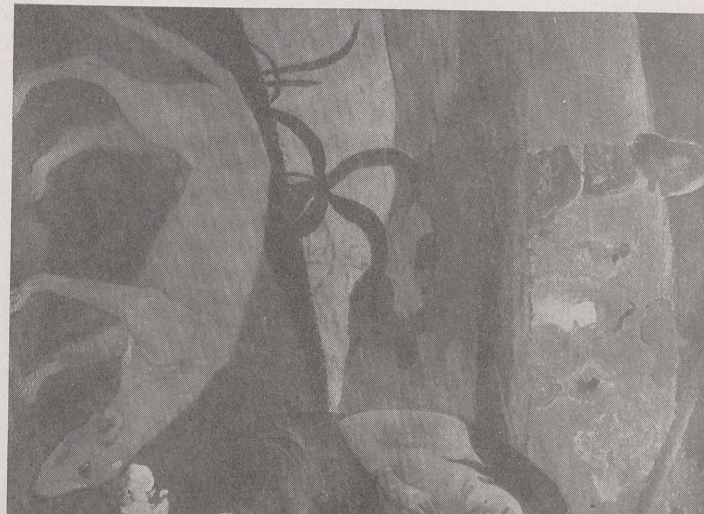


Pastorale tahitienne

9



Les joueuses de flûte devant l'idole 10





L'idole

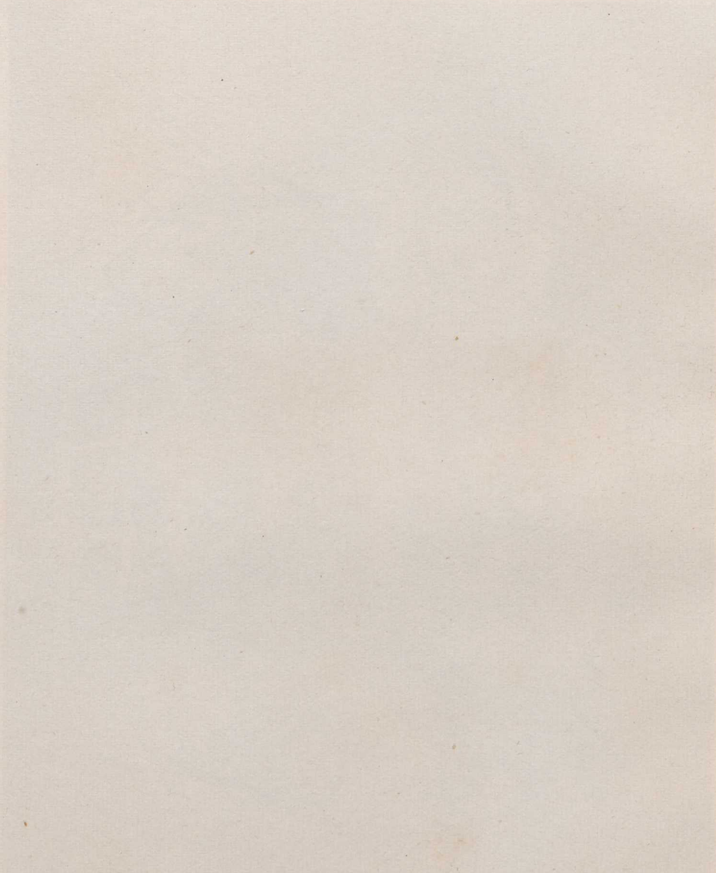
II


P. Gauguin 93
HINA MARURU



Le cheval blanc





Matirnité 13

(lithographie)



Tahitien assis 14

(dessin)



大正二年十一月十五日印刷
大正二年十一月十八日發行

定價金壹圓

白樺叢書
（ノ・アノア）

奥付
不許複製

著者　小泉鐵

發行者　河本龜之助
東京市麹町區麹町二丁目二番地

印刷者　河本俊三
東京市麹町區麹町二丁目二番地

印刷所　千代田印刷所
東京市麹町區麹町二丁目九番地

發行所
東京市麹町區
麹町二丁目二番地
洛陽堂
電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四